

サキュバス夫婦生活

～長身爆乳人妻によるマゾ男搾り～

R-18

ADULT ONLY

成人向け作品です。
18歳未満は閲覧禁止



目次

第一章

・・・・・・・・ 1 頁から 5 1 頁

第二章

・・・・・・・・ 5 2 頁から 1 6 0 頁

第三章

・・・・・・・・ 1 6 1 頁から 2 5 0 頁

第四章

・・・・・・・・ 2 5 1 頁から 3 4 1 頁

第五章

・・・・・・・・ 3 4 2 頁から 4 4 4 頁

第六章

・・・・・・・・ 4 4 5 頁から 6 4 9 頁

第七章

・・・・・・・・ 6 5 0 頁から 8 0 9 頁

エピローグ

・・・・・・・・ 8 1 0 頁から 8 5 6 頁





巴雪さん

高身長爆乳サキュバス。男の子種を捕食するとさらに成長する。人類離れした性投で男の精液を簡単に搾りとってしまう。マズの殿方の悦ばせ方を熟知している。

第一章

迷ってしまった。

鬱蒼としげった山の中だ。

連休を利用して東北の山を縦走していたところ、目の前から道がなくなってしまった。

「困ったな」

ひとりごとが漏れる。

笹草が地面のすべてを覆っている。引き返そうと思ったところで後ろをふりかえってみれば同じく笹草だらけで、道の面影だつてどこにもなかった。

「獣道だったか」

知らないあいだに登山道からはずれてし

まったらしい。完全に道を見失っていた。

「困ったな」

さらに悪いことに方位磁石すら使い物にならなかった。

おそらく周囲に磁気を帯びた鉱石が散在しているのだろう。これでは自分の現在位置を確認することもできない。もちろんスマフォだって繋がらない。太陽の位置からなんとか方角でも分からないかと空を見上げて、鬱蒼としげった樹木たちが太陽の姿を遮ってしまった。しかも悪いことは重なるものだった。

「間違はなく、捻挫してるな」

右足首に感じる違和感。

どうやらさきほどひねった時に捻挫をしてしまったらしい。歩けることは歩ける。

けれどもズキズキとした痛みがひどくなっていた。

「困ったことになったぞ」

もう15時だ。

深い山の中ではそろそろ活動をやめて寝床を探す時間帯だった。幸いなことにテントなどの装備はある。どこか野営できる場所を探す必要があった。

「とにかく進むしかないか」

私は歩き出した。

笹草が足に絡みついてくるのを煩わしく感じながら必死に歩を進める。夏の熱気で汗が吹き出てくる。右足はどんどん痛くなる。私はなかば足を引きずるようにして、笹草や木々をかきわけるように進んでいった。

どれくらい悪戦苦闘していただろう。

目の前。

突然それは現れた。

＊

「な、なんだこれは」

暗い森の中にぽっかりと空間がひらけていた。

不自然に樹木が消えている。その場所に足を踏み入れた瞬間、なぜか動物や虫の気配が消えていた。シーンと静まりかえって、肌に伝わってくる空気も冷たいものに変わった。

目の前には廢墟があった。

木造でつくられた何かの建築物のあとだ。

完全に朽ち果てている。建物だった痕跡がかろうじて分かるだけ。その痕跡の一つが目に飛び込んでくる。それには見覚えがあった。

「と、鳥居か？」

朽ち果てていたが、それは確かに鳥居だった。ただの樹木に見えたが、よく見ると鳥居だ。ということは、ここは……、

「神社か」

ぞくっと背筋が凍る。

理解できない恐怖が全身を包みこむ。

こんな山の中に、なぜ神社が存在しなければならぬのだ。私が縦走している山々は間違っても人里があるような場所ではない。電気だって通っていないし、冬になれば雪で覆われ登山客さえ進入が許されない

場所になる。そんな深い山の中に、なぜ神社が存在しなければならぬのか。

「……白蛇神社」

鳥居には、かすれた文字でそう書かれていた。

ということは本当に神社なのだ。

私は訳が分からなくなった。

理解不能な光景に体がふるえる。

「と、とりあえずお参りするか」

このまま素通りしてはダメな気がした。

朽ち果てた鳥居をくぐって廃墟に近づく。

もはや拝殿も本殿も見ると影もないほど崩れていた。私はその廃墟にむかって手をあわせ、目をつぶり、祈る。

——どうか無事に下山できますように。

——足の痛みが引きますように。

——あと、できれば結婚したいです。

目をあける。

私の横に女が立っていた。

「ひ」

恐怖で体がふるえる。

見間違いではない。

女だ。

老婆かと思つたがそれも違った。

若い女だ。

少なくとも私よりは若い。それなのに肌はかさかさ荒れていて、その長い黒髪も色素が薄くなって汚れて見えた。服装だつて今時見かけない和装だ。背がかなり高いことが女の異常性を高めているように思えた。まるでホラー映画の中に入り込んでしまった感覚になる。

年若い山姥。

妖怪か？

呪われてしまったのか。

私が何をしたというのだ。

心臓がバクバク鳴る。恐怖で背筋が凍り、今すぐここから逃げろと本能が全力で命令してくる。それでも一歩も動けなかった。女は変わらずに私の横で立っていた。

「あ、あの」

女の声だ。

やはり若い。声には艶が残っている気がした。

「あの、大丈夫ですか？」

それは心の隙間にすんなりと入ってくるような声だった。

それを聞くと、なぜか恐怖が体から抜け

ていくのを感じた。

(現実の……女だ)

恐怖がなくなつてようやく理解する。

目の前には女が立っているのだ。人間の女だ。間違つても妖怪とか幽霊ではない。

「足、ケガされてるんですか？」

女が心配そうに声をかけてきた。

その瞳は不安げに潤んでいる。

艶がある憂いを帯びた瞳。

背が高い絶世の美女だ。

それなのに、なぜか枯れ果てた印象がぬぐえなかつた。生氣というものを何も感じないのだ。それがなぜか、とても印象に残つた。

「だ、大丈夫です。軽く捻挫してしまつただけで」

なんとか声を振り絞る。

女は「大変」と、まるで自分が怪我をし

たみたい顔に顔をゆがめた。

「はやく手当をしたほうがいいです」

「そ、そうなんです、いかんせん、登山道からはずれてしまつて、はやく野営地を探さないとならんのです」

しどろもどろになりながら言う。

女はそんな私のことを黙つて見つめてくる。

何かを迷っている。

そんな表情に見えた。

女が言った。

「よろしければ、うちに来ませんか？」

「え？」

「わたしの家でよければ泊まっていってく

ださい。祖母と二人暮らしですので遠慮は無用です」

＊

女は、白崎巴雪（しらすき みゆき）と名乗った。

ご厚意に甘えて彼女についていくと、案内されたのは古びた和風建築物だった。一昔前の田舎の家だ。土間があつて、薪で煮炊きをする炊事場があつた。

「ふう」

出迎えてくれた巴雪さんの祖母に案内された部屋で一人くつろぐ。どうやら客間らしく、茶色く変色していたが畳だった。その上であぐらで座り、靴下を脱ぐ。

「腫れてきたな」

捻挫した右足首は明らかに腫れていた。

何もしていないのにズキズキと痛む。

経験からするとかなりまずかった。明日になったらさらに悪化してしまうかもしれない。

「どうしたものか」

一人で山歩きをしている時のように、ひとりごとが口から出てくる。

山の中を歩いていたら神社があつて、そこで拝んだら女が現れ、家まで案内してくれた。まるで日本昔話に出てくる物語のようだ。けれどもこれは現実で、巴雪さんもおばさんも現実存在するのだ。そう思ってもなぜか現実感というものがなかった。「失礼します」

巳雪さんだ。

彼女は水の入った大きなタライを持って部屋に入ってきた。

「おくつろぎ中、申し訳ありません。今、大丈夫でしょうか？」

「は、はい」

「怪我の手当をしたほうがいいと思いますし、冷たい水と布をもってきました」

どうやら氣を使わせてしまったようだ。

けれどその厚意はありがたかった。

「すみません。正直助かります」

私の言葉に巳雪さんがにっこりと笑った。

人の心を安心させるような控えめな笑顔だ。彼女は私の近くで正座になると、上目遣いでこちらを見つめてきた。女性に免疫がないせいでドキドキと心臓が脈打つ。カ

サカサに乾いた肌と、手入れもしていないであろうボサボサの髪でなければ、絶世の美女に違いなかった。

「それでは、足を失礼しますね」

巳雪さんが笑って言う。

私は慌てて、

「あ、自分で」

「大丈夫ですよ。わたしに任せてください」

「で、でも」

「山歩きで怪我をした人の手当には慣れてるんです。遠慮しないでください」

その優しげな声を聞くとそれ以上断れなかった。

私は「すみません」と謝りながら、彼女に腫れている右足を差し出した。

「はじめますね」

彼女の手が私の右足に触れる。

その瞬間、私の体がびくんと跳ねた。

(な、なんだ?)

恐怖で体がふるえたのではない。

これは快感だ。彼女にさわられた足から電流が走り、それが股間に直結して気持ちよさが爆発した。

「ん、あぁッ」

声が漏れてしまう。

彼女の手の感触で悶絶する。やわらかい。とても心地がよくて、頭が真っ白になる。

その理解不能な快感に若干の恐怖を、

「大丈夫ですよ、大谷様」

巳雪さんが私の名を呼びながらニッコリと笑った。

「安心して、身をゆだねてください」

「は、はひ」

「ふふっ、すぐに終わりますから」

そう言うと彼女は私の右足を水の入ったタライにひたした。冷たい水の感触が患部を冷やしていくのが分かる。巳雪さんは丁寧に、まるで宝物を扱うように私の右足をいたわってくれた。水の中で患部を優しく撫でられる。その感触にまたしても「あひん」と声が漏れるのだが、巳雪さんは優しく笑うだけで、こちらをとがめる様子は何もなかった。

「足、鍛えているんですね」

「あへ？」

「筋肉、とっても逞しいです」

私の右足に優しく水をかけながら巳雪さんが問いかけてくる。ちゃぷちゃぷという

水の音。心の隙間に入り込んでくるような優しげな声が響く。

「なにかスポーツをされているんですか？」

「い、いえ、私はただの会社員で、普段は運動もできないんですが、休みの日には山のぼりなんかをしています」

「そうなんですか……だからこそ、ここまですり着けたんでしょうね」

巳雪さんが私の右足首をタライから取り出す。そしてタオルで丁寧にふき始めた。まさに至れり尽くせり。彼女の手の感触だけで私の体がびくんとふるえ、夢心地になってしまった。

「終わりました」

気がつくとも私の右足首には清潔な布が巻かれ固定されていた。可動域が制限されて

だいぶ痛みも軽減されていることが分かる。

「あ、ありがとうございます。すごい。完璧なテーピングですね」

心底感嘆する。

「本当に見事です。ありがとうございます。巳雪さんのおかげでだいぶ楽になりましたよ」

正直な気持ちだ。

それを口にしただけなのに、なぜか巳雪さんがモジモジし始めた。

「そ、そんな……わたしなんて、ぜんぜんです。こんなの、ぜんぜん」

黙っていると怖そうに見えるほど理性的な彼女が、顔を赤らめて恥ずかしがっている姿はともかわいらしく見えた。何をそんなに恥ずかしがっているのか分からず声

をかけようとすると、巳雪さんが勢いよく立ち上がった。

「そ、それではわたしはこれで失礼します」

「え？」

「きよ、今日はお風呂はやめておいたほうがいいと思います。しょ、食事の準備をしますので、楽になさってください」

ぽっと頭を下げて退室してしまふ。

巳雪さんの匂いを部屋中に感じながら、私は一人、ぽかんと取り残された。

*

どうやら巳雪さんは人に褒められることに慣れていないらしい。

夕食の時にも、巳雪さんの準備してくれ

た食事があまりにもおいしかったので率直な感想を言うと、彼女は顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

「なんだか、かわいい人だな」

客間でいつものようにひとりごとが漏れる。

食事も終わり、夜も深まった時間帯だ。

家には電気が通っていないので、あんどんに設置されたロウソクの火が、あたたかい明るさを客間に提供してくれていた。用意してくれた布団に寝転がったまま、ぼんやりと天井を見上げる。

「不思議な人だ」

脳裏に彼女の姿が浮かびあがってくる。

「優しい人なんだろうな」

それが直感として分かった。

少し褒めただけで恥ずかしがる様子もかわいらしかった。

「寝るか」

体力は限界をむかえている。

私はロウソクの火を消した。

人工的な明るさは消え、部屋の中に月明かりが差し込んでくるのが見えた。今日は満月だったのだ。暗闇が深いと月の明かりもまぶしく感じられる。私は柔らかかそうな満月の存在を感じながら、ゆっくりと眠りについた。

*

夢を見た。

大きな白い蛇に襲われる夢だ。

彼女の体は大きくて分厚かった。その大蛇は私の全身にぎっちり巻きついてきていた。身動きがとれない。それなのに苦しきはなかった。なぜかとても柔らかかった。ひんやりとした餅肌。底なし沼みたいに沈んでいく体。そして、全身に伝わってくる性的な快感。それがずっと続いた。

「ごめんなさい」

声がした。

それは巳雪さんの声に似ていた。

私のまぶたが自然とひらいた。

「ごめんなさい」

ぼんやりとした視界の中。

疲れ果てた体の重さを感じながら、巳雪さんに似た全裸の女性を見上げる。

月明かり。

幻想的な雰囲気には照らされた極上の女体。

そのおっぱいの大きさに圧倒されてしま
う。彼女の体から何かピンク色の蒸気みた
いなものが出ている。強く熱く欲情してい
る女性が、当然のように私の一物を握った。

「う」

私の体がピクンッと跳ねた。

握られただけ。

それなのに体全体に性的な快感が爆発し
た。

自分の体が自分のものではなくなってし
まった気がする。何度か断続的に体が跳ね
て、ようやく気づく。目の前の女性は巳雪
さんだ。これは夢ではない。就寝中に襲わ
れているのだ。

「ごめんなさい」

巳雪さんが繰り返す言う。

瞳をうるませて、今にも泣きそうになり
ながら、その欲情しきった視線で私のこと
を見下ろしてくる。

「もう……我慢が……」

ハアハアという荒い息遣いが聞こえる。

欲情しているのだ。その乱れた姿はあま
りにも妖艶だった。

「き、きもちよく、しますから」

巳雪さんが言う。

「ごめんなさい」

始まったのは性的な暴力だった。

熱烈な手コキが私の肉棒を殺しにかかっ
てくる。巳雪さんの手が動くたびに私の体
が嘘のように痙攣した。

「うううっ！」

声が漏れてしまう。

巳雪さんの右手がねっとり竿に絡みついてくる。長くて白い指が竿に巻きついて変幻自在に動きを変えていく。亀頭を包み込まれてぐりぐりと回転させられたかと思うと、強烈なピストンで蹂躪される。

それとは正反対に巳雪さんの左手は私の玉袋を繊細なタッチでなぶってきた。触れるか触れないかの絶妙な生殺しタッチで玉袋の愛撫が続いていく。その動きによって性欲が極限まで高められていくのが分かった。

「み、巳雪さん、な、なんで」

訳も分からず声をかける。

しかし目の前の女性は理性を失ってしまった。
っていた。

「ふうううッ！ ふうううッ！」

鼻息を荒くした女豹。

瞳をハートマークにして欲情した痴女が、ただ熱烈に私の一物を責めてくる。昼間の理性的で上品な女性がこうも乱れているかと思うと興奮した。彼女の手コキであつという間に追いつめられて、すぐに射精しそ
うになる。

「ま、まってください。もう」

「……………」

「あ、だめですからッ！」

「……………」

今の巳雪さんには声が届かない。

逆に私の限界をさとしたのか、巳雪さんの手の動きが過激さを増した。すぐに射精させる。そう決意していることが分かる執

拗な手つき。私はそのまま射精した。

「ああああっ！」

どっびゅううううッ！

びゅっびゅうううッ！

命が奪われていくのが分かる。

射精が止まらない。

それを継続させているのは巴雪さんだった。彼女は射精中だろうが容赦なく、私の肉棒を虐殺していった。丹念に、執拗に、射精中の肉棒に追い打ちをかける。

——一滴たりとも逃がさない。

そう決意しているみたいな動きで、射精の脈動にあわせて竿を根本から亀頭までしこっていく。彼女の手の動きにあわせて私の射精が永遠と続く。ゆっくりと、射精の脈動の間隔が遅くなる。それでも巴雪さん

は止めてくれなかった。最後の一射精まで丹念に、どこまでもしつこく、巴雪さんが私の子種を搾り取ってしまった。

「ふふっ」

目の前の女性が妖艶に笑った。

「すごい……とっても……」

巴雪さんが欲情しきった瞳を浮かべている。

精液まみれになった自分の手。さんざんに私の肉棒を虐めまくり、精液でドロドロに汚れた手を、巴雪さんがネットリと見つめていた。

「すごく上質な……子種」

妖艶な笑み。

もはや私のことなんて目に入らないように、彼女は自分の手にこべりついた精液を

愛しげに眺めている。私はそんな彼女のこ
とを、射精直後の消耗しきった倦怠感の中
で見上げていた。

「ふふっ、いただきます」

妖艶に笑った彼女が舌を出した。

それは長く肉厚な舌だった。まるで蛇み
たいだ。顎の下まで伸びた舌に圧倒されて
いると、巳雪さんはそのまま精液を舐めた。
舌ですくうように精液を絡めとり、そのま
ま口に運んで食べてしまう。

「んっ」

官能的な喘ぎ声。

その甘ったるい声だけで私の下半身がび
くと反応してしまった。

「んっふ………んっ」

喘ぎ声が続く。

頬張った精液を味わっている。

飲み込むことなく、その感触と味を堪能
しているのが分かる。さきほどまで自分の
一部だった子種が、女性の口の中に捕獲さ
れて食べられてしまっていた。

「ンッ」

声が響き、喉が嚥下する。

ごくんと喉が大きく鳴って、飲み込んで
しまった。

その効果は激烈だった。

「んんっ………すごい」

夢心地になった巳雪さんの声。

その大きな体が明らかに存在感を増した。
あれだけ枯れ果てた印象のあった彼女の体
に、生命力がみなぎるようだった。その迫
力を前にして、私はなぜか、この生物には

勝てないと強く思った。

「……おいしい」

ねっとりとした視線で幸せそうに笑った女性。

彼女の視線の先には私の精液がある。

まだこんなに残っている。

そんなことを考えていることが手にとるように分かるほど、巳雪さんが私の放出した子種を愛しげに見つめて、そして、

「んっふううっ」

ジュルウウウウッ！

ジュバアアジュッルッ！

かぶりついた。

自分の手ごとむさぼり食らうみたいにな、巳雪さんが精液を食べ始める。じゆるじゆるっと、私の子種がすすられて、そのまま

捕食されてしまう。喉がゴキユンゴキユンと鳴って、味わうことなく単純に食べていく。

「あああアッ」

私の口から声が漏れる。

食べられてしまっている。私の精液が、目の前の女性に喰われ、消化されてしまう。そのことがとても官能的に思えてならなかった。

あれだけあった精液があっという間になくなる。

巳雪さんが興奮した瞳のまま、自分の手を舐め始めた。あの長い舌を出して、ペロペロと舐め続ける。一滴たりとも逃さない。そんな執拗な舌舐めがずっと続く。指と指の間まで丹念に舐め続け、ようやくそれが

終わった。

「すごいです」

巳雪さんがつぶやく。

ピンク色の蒸気がわきただけで、

その甘い匂いを嗅いただけで、私の理性はぐちゃぐちゃに溶けてしまった。あれだけ射精したのに、私の肉棒が盛大に勃起している。

「すごい」

巳雪さんが私の肉棒に気づく。

妖艶に、優しげに、彼女がにっこりと嗤っている。

「きもちよくしますから」

ゆっくりと巳雪さんが近づいてくる。

私にまたがり、その大きなお尻で私の下半身を制圧してしまう。こうなったら物理

的にも動けない。私の下半身に馬乗りになった巳雪さんが、憂いを帯びた瞳で問いかけてくる。

「ダメですか？」

「うっ」

「絶対にきもちがいいはずですよ。必ず満足させてみせます。だから、お願いします」
ゆっくりと彼女の手が私の肉棒を撫で始める。

触れるか触れないかの絶妙なタッチで愛撫し、私の性感を高めていく。私はなすすべもなく、コクンとうなづいてしまった。

「嬉しい」

巳雪さんが笑った。

「絶対に満足させますから」
がしっ。

再び巳雪さんが私の肉棒を握る。

まるで宝物でも扱うように、彼女が私の肉棒を扱い始める。快感が暴力みたいに押し寄せてくる。すぐに限界をむかえて、射精する。それを巳雪さんが食べて、またおねだりが始まるのだ。それが、ずっと、ずっと続いた。

(食べられてる……私は食べられて……)
意識がもうろうとしてくる。

こちらを愛しげに見下ろしてくる巳雪さんの笑顔を見つめながら、私は意識を失った。



気がつくと、昼間だった。

太陽はすでに天高くのぼっている。時計を見ると既に12時だった。寝過ぎたのだ。そのことが自分自身信じられなかった。「疲れてたのか」

山のぼりの疲れがたまっていたのだろう。全身をひどい倦怠感が包んでいる。

2日前から山に入ってひたすらに歩いてきた。これまでの行程が脳裏によぎっていく。昨日は道に迷って廃墟と化した神社で巳雪さんに、

「う」

昨日の夜のことを思い出す。

全裸の巳雪さんの大きな体。

さんさんに搾り取られた記憶。

私の精液をおいしそうに堪能していた妖艶な女性の笑顔。

「夢、だったのか？」

わからない。

夢だとすればとてつもなくリアルな夢だった。私は自分の布団をくまなく確認して、昨日の痕跡が何か残っていないかと探してみたのだが、何もみつからなかった。

「おきるか」

登山中のいつもの日課でひとりごとを漏らす。

布団を簡単に畳んで部屋の隅に置く。

部屋を出て土間におりると、おばあさんがせつせと釜の準備をしていた。「おはようございます」とあいさつをすると、おばあさんが立ち上がった、

「おはようございます。昨日は休めましたかな？」

「え、ええ。すごくよく眠れました。でも、申し訳ありません。こんな時間まで寝てしまった」

「なんのなんの。気にしないでください」

おばあさんのシワだらけの笑顔に私は救われる思いだった。

「それに、まだ怪我が治っていない様子。今日もうちに泊まっていてください」

「そ、それはさすがにご迷惑では？」

「なんのなんの。お客人は珍しいですから。ゆっくりしていけばよろしい」

遠慮があったが、おばあさんのご厚意に甘えることにした。もう正午をまわっていて、これから山の中を歩くのは危険だった。午後の山の天候は荒れることが多いのだ。「まずは顔を洗ってきなされ。不便で申し

訳ないですが、近くに川が流れている。裏庭の先なのですぐに分かるはずです」

森がひらけて、沢の流れが視界に飛び込んでくる。

私は礼をしてから土間をあとにした。

そして、

朝起きた時から続く倦怠感でふらつきながら、案内された川に向かって歩き出した。

私はそれを見た。

*

裏庭に出てみると川に続く道がすぐに見つかった。

鬱蒼としげった森の中を進む。

太陽が隠れて薄暗い空間が続いている。

まるで秘密の場所に通じる小道のようだ。

その道中なぜか甘い匂いがした。その匂いはどんだんと強くなっていく。

川の音が聞こえる。



「う、わ」

川の中で全裸の女性が一人たたずんでいた。

大きな体だった。

明らかに私よりも高い身長。おっぱいが大きく、張りがあり、ピンク色の乳首が周囲の獲物を誘うみたいに鎮座している。お尻も大きくてどっしりしている。足が信じられないくらいに長くて、その太ももはムチムチとして、とても柔らかそうだった。まるで生命力の塊みたいに彼女は見えた。

(す、すごい)

気が動転してしまい、一步後ろに下がる。

その時、枝を踏んでしまって、バギッと音がした。

「あ」

その音で気づかれる。

川の中の女性が私のほうに振り返り、恥ずかしそうに顔を赤らめた。そのまま彼女は自分の胸と秘所を手で隠そうとしながら、ぺこりと私にむかってお辞儀をした。憂いを帯びた瞳。絶世の美女がそこにはいた。その顔には見覚えがあった。

「み、巴雪さん」

ようやく気づく。

川の中の女性は巴雪さんだった。彼女は手早く体を手ぬぐいで拭くと、さっと上着だけをはおった。そして控えめな笑顔を私に向けてくる。

「おはようございます」

透き通るような声。

私はフラフラしながら彼女に近づき、「お、

おはようございます」と狼狽しながら答えて、異変に気付いた。

(な、なんだこの匂い)

甘い芳香。

川に来るまで感じていた甘い匂いは、明らかに巳雪さんの体から発せられていた。彼女に近づけば近づくほど、その匂いは強くなった。嗅ぐごとに体がビクンとふるえて快感が走る。食虫植物が発する甘い匂いに誘われた昆虫のように、私は巳雪さんにフラフラと近づいてしまった。

「よく眠れましたか？」

「は、はひ。ええ、はい」

「顔を洗いにこられたんですね。よかつたらこれをお使いください」

にっこりと笑って、さきほど自分の体を

拭いた手ぬぐいを手渡してくれた。私はプルプルしながらそれを受け取り、目の前の巳雪さんを見つめるしかなかった。

(ほ、本当に昨日と同じ人なのか?)

そう思わざるを得ないほど巳雪さんは変わっていた。

昨日はカサカサに乾いた肌だった。髪も色素すら失ったみたいにボサボサだった。老婆と見間違うほどに枯れ果てた女性であったはずだ。

それがどうだろう。目の前の巳雪さんは生命力に満ちあふれていた。肌は水滴をはじくほどのみずみずしさを誇っていて、髪も艶のある漆黒に変わっていた。こうして近くにいただけで圧倒され、自分という存在が吸収されてしまうような存在感がある。

「あの、大丈夫ですか？」

その言葉でハっとする。

あまりにもじろじろと見つめ過ぎてしまったらしい。憂いを帯びた瞳で心配そうにこちらを見つめてくる巳雪さんの姿が目に見え込んできて、その美しさに思わず「う」と呻いてしまう。

「昨日の影響がまだ残っていますか？」

「へ？」

「昨日の……夜のことです」

その言葉にどくと心臓が脈打つ。

あれはやはり夢ではなかったのだ。

昨日の夜、私は巳雪さんに搾り取られた。そのことを自覚すると、私の体が歓喜でビクンとふるえた。体が喜んでいることが分かる。昨日、あれだけ気持ちよくしてくれ

た相手を目の前にして、本能が悦んでいるのだ。それがはつきりと自覚できた。

「ごめんなさい。わたし……」

巳雪さんが顔を真っ赤にして、うるうると瞳に涙をため始めた。

「我慢できなくて……男の人と会うのが久しぶりだったので……本当にごめんなさい」

その宝石みたいな涙が落ちそうになっている。私は慌てて言った。

「いや、そんな、謝らないでください」

「でも……」

「む、むしろ私のほうがお礼を言わないといけないくらいで。巳雪さんみたいなステキな女性に、その、してもらって、すごいラッキーだなって」

私の言葉を受けて、巳雪さんがじっと私

を見つめてきた。

憂いを帯びた瞳が至近距離から迫ってくる。その顔に笑顔がぱあっと咲いた。

「嬉しい」

ゆっくりりと。

自然に。

巴雪さんが優しく私の体に身を寄せてすがりついてきた。身長差があるせいで、ちょうど巴雪さんの大きなおっぱいが私の顔面におしつけられる格好になる。甘い匂いで頭がジンと痺れた。

「そんなこと言われたの、初めてです」

「み、巴雪さん」

「わたし、がんばりますから」

彼女が私の耳元に顔を寄せてきた。

そして心を溶かすような妖艶な囁き声で、

「夜、期待していてくださいね」

「ああああッ！」

その言葉だけで体がビクンと跳ねる。

すぐに私から離れた巴雪さんは、控えないいつもの様子に戻っている。それでも彼女の妖艶な声がいつまでも私の耳に残ったままだった。



夜が来る。

昼ごはんも夜ごはんも精のつくものを食べさせてもらって布団に入る。今日も月のあかりがまぶしいくらいだった。私は早々に口ウソクなあかりを消して横向きに寝転がった。

(巴雪さん、本当に来るんだろうか)

昼間の記憶がよみがえる。

夜、期待しててくださいね。

また、昨日と同じことをしてもらえらるの
だろうか。そんな性欲に支配された頭で永
遠と悶々とする。そして、その時は突然お
とずれた。

*

障子がひらかれる音。

それが聞こえてドクンと心臓が跳ねる。

誰かが部屋の中に入ってくる。横向きに
寝ている私の背後。歩くたびにきしむ畳の
音がとても淫らに聞こえた。

「……………」

無言のまま。

静かに——女性が服を脱ぐ音が響く

彼女はそのまま私の背後からゆっくりと
布団に入ってきた。私の体の前に彼女の腕
がまわされ、優しく抱きしめられる。

「う」

そのひんやりとした感触に思わず声が漏
れる。

彼女は全裸だった。大きなおっぱいが私
の背中でごんにやりと潰れている。乳首の
突起が背中にすりつけられる。長い足が私
の足に絡みついてきて身動き一つとれなく
なるほど抱きしめられてしまった。

(き、きもちい)

抱きしめられているだけ。

それだけなのに体が歓喜のあまりびくん

びくんふるえている。甘い匂いが脳髓を殴ってくる。ひんやりと冷たい彼女の体が、夏の熱さの中でとても心地よかった。

「あ」

ゆっくりと彼女が私の肉棒を握った。

それだけで自分のすべてが支配されてしまったことを感じた。私を自由に操るための操縦桿を握った彼女が、いやらしく私を操縦し始める。あまりの快感で声が漏れてしまった。

「あひんッ」

「……………」

彼女は無言だ。

背後から私のことを抱きしめ羽交い締めにして、身動き一つとれなくしたあげく、ねっとり執拗に、私の肉棒を虐めてくる。

身動き一つとれない。私の感覚が肉棒だけになっていく。あまりにも気持ちよすぎて、さきほどから「ああん……ひいん」という喘ぎ声が止まらなかった。

「今日はじっくりやります」

彼女が私の耳元で妖艶にささやく。

「昨日は急ぎすぎてしまったので、今回は時間をかけてきもちよくなりましょう。わたし得意なんです」

ねっとりとした手つきがさらに増す。

彼女の両手が私の肉棒と玉袋を永遠と虐めていく。

昨日のような精液を搾り取るための動きではない。私の興奮を高めるための動き。天井知らずの快感が射精というゴールを許されずに、どんどん高まっていく。

「喘ぎ声、すごいですね」

「あひい……ヒインッ！ あ、あ、あ」

「大丈夫。恥ずかしがることないんですよ？

みんなこうなってしまうんです。喘げば喘ぐほど気持ちよくなれますから、もっとみっともなく、気持ちよくなってください」

さらに彼女の手つきが執拗になる。

私の快感を残酷なまでに高めていく。

彼女の大きな体に包まれて、私は赤ん坊のように喘ぎ続けた。

*

どれほど時間が経ったのだろう。

彼女は私の体を解放すると、ゆっくりと起き上がった。そのまま仰向けに倒れた私

の腹の上に優しく座り、こちらを見下ろしてくる。

「あひん……ひい……」

息も絶え絶えになりながら、彼女を見上げる。

月明かりを背景にして全裸の巳雪さんが優しく私のことを見下ろしてくる。生命力の塊みたいな女性。おっぱいの大きさがまるで威圧するみたいに迫ってきていた。その姿は本当に……、

「きれいだ」

正直な言葉が口から出る。

こちらを見下ろしていた巳雪さんが顔を真っ赤にしてもじもじし始める。やはり彼女は恥ずかしがり屋のようだった。

「失礼しますね？」

彼女は顔を真っ赤にしたまま笑って私の体に真正面から寄りかかってきた。おっぱいが私の胸で潰れる。その整った超絶美人の顔が至近距離に迫る。憂いを帯びた瞳が真正面から私のことを見つめてきた。

「嬉しいです。とても。すごく」

「み、巳雪さん」

「……………好き」

「むぐううッ！」

唇を奪われる。

そのぷっくりとした柔らかい感触に陶醉していると、彼女の長い舌が進入してくる。それは本当に長い舌だった。私の口内が優しく、それでいて熱烈に愛撫される。

「あひん……………ひい……………」

またしても喘ぐだけになる。

自分も舌を絡ませようとするのだが、それもできない。熱烈な口づけを前にして、私はなすすべもなく蹂躪された。

「ん」

甘い声が漏れ、巳雪さんが唇を放した。唾液を上品にすすって回収し、私のことを見下ろしてくる。

「ひょっとして、初めてですか？」

「う」

「キスするの、初めてですか？」

凶星だった。

恥ずかしくて顔が真っ赤になる。女性とつきあったこともない自分にとってのファーストキスだったのだ。惨めだった。けれど、「うれしい」

にっこりと笑った巳雪さんの笑顔で、す

べて許された気持ちになる。

「大丈夫。わたしに任せてください」

「あ」

「きもちよくしてあげます」

再び唇が奪われる。

体をこれ以上ないほど密着させた上での
ディープキス。仰向けに寝転がった私の体
は、巳雪さんの大きな体によって圧迫され
てしまっている。またしても身動き一つと
れなくなる。捕らえられ、捕食され、消化
されているような感覚。彼女の大きなおっ
ぱいが胸で潰れ、下半身には彼女の長くて
ムチムチした足が絡まされて、私はされる
がままになってしまった。

(き、きもちよすぎるううううッ)

頭がおかしくなっていく。

ぼおっとして何も考えられず、喘ぎ声を
あげるだけの人形になる。理性がすべて溶
かされ吸収されてしまっている。甘い匂い
で思考がまとまらない。ただただ唇を食べ
られる。激しいキスの唾液音と、ときおり
漏れる巳雪さんの「ん」という甘い声で、私
はどこまでもバカになっていった。

「どうでしたか？」

長いキスの時間が終わり、巳雪さんが聞
いてくる。

おでことおでこを合わせた至近距離。乱
れた巳雪さんの髪が頬にくっついていて、
とても淫らだった。艶やかな憂いを帯びた
瞳で問いかけられると、とりつくろうこと
もできなくなってしまう。

「き、きもち……よかったです」

「本当ですか？」

「は、はい。すごかった……です」

「気に入りましたか？」

体がビクンとふるえる。

コクンと首を縦にふった。

「嬉しいです」

巳雪さんが笑う。

「わたしの舌、人よりも数倍長いんです。なので気持ち悪いと思われてしまうかも思っていたので、安心しました」

「な、長い？」

「はい。ほら」

大きな口があき、舌がペロンと飛び出てきた。

「う、わ」

驚きに声が漏れる。

巳雪さんの舌は本当に長かった。艶めかしい舌が顎の先まで伸びている。細長くて蛇みたいな舌先。それがぐねぐねと器用に動いているのを見て、私は思わずゴクリと唾を飲み込んでしまった。

「今からこれできもちよくしてあげますね」
にっこりと優しく笑った巳雪さんが言う。

その憂いを帯びた表情と、さきほどの舌を大きく出した淫らな様子とのギャップで、私はありえないほどに興奮していた。

「立てますか？」

心配そうに聞かれて、私はなんとか立ちあがろうとする。しかし、快感で腰が抜けていて足に力が入らなかつた。私は必死に、生まれたての子鹿みたいに足をふるふるさせながら、壁に背中を預けてなんとか立ち

上がった。

「失礼します」

「あ」

私が静止するヒマもなく、巳雪さんが私のパンツを完全に脱がした。フル勃起した私の肉棒が巳雪さんの眼前にさらされる。

「すごく……大きい」

巳雪さんがとても嬉しそうに言った。

断っておくが、私のモノは別段大きくない。むしろ平均より小さいくらいだ。それなのに巳雪さんは欲情しきった視線で私の肉棒を凝視していた。

「ご奉仕させていただけます」

にっこりと笑って巳雪さんが再び舌を出した。

あの長い舌が私の肉棒に絡みついてきた。

「んんッ……じゆるううッ」

「あひいいッ！」

ぺろぺろと巳雪さんが肉棒を舐め始めてしまう。

舌のあたたかい感触が肉棒から腰に伝わってくる。舌が生きてるみたいに見える。アイスクリームでも舐めるみたいに私の竿全体が舐められる。細長い舌先が龟头だけをノックして尿道をほじくりかえしていく。変幻自在の舌技がずっと続く。

「ひゃああッ」

がくがくと腰がふるえていく。

はやくも倒れそうになった瞬間、巳雪さんが肉棒を捕食してしまった。

「じゅぽおおッ！」

「ひいいいんんッ！」

声が漏れる。

亀頭だけ。それが巳雪さんのぷっくりとした唇に捕まり食べられてしまった。倒れそうになる私のことをかかえながら、巳雪さんがじゅっくりと私の肉棒を味わっていく。

「んふっ」

動き出した。

ゆっくりと。

本当に少しづつ。

巳雪さんが私の肉棒を丸飲みしていく。私の勃起した肉棒がじわじわと捕食されていく。それはまるでヘビの丸飲みだった。口を大きくあけた白蛇に丸飲みされてその体内で消化されてしまう。

(ぎ、ぎもじいじいじいじいッ)

巳雪さんの口の中は天国だった。

丸飲みされ、消化されていくのにそれが快感になる。亀頭は彼女の喉奥まで到達し、さらに深くまで引きずりこまれていく。たっぷりと時間をかけた捕食行為。巳雪さんがようやく私の肉棒を根本までくわえこみ、丸飲みを完成させてしまった。

「んフッ」

肉棒を丸飲みしたまま、巳雪さんがじゅと動かなくなった。

かわりに雄弁に語ってくるのは彼女の瞳だ。優しいな笑顔を浮かべた彼女が上目遣いで私のことを見上げてくる。喉奥まで肉棒をくわえているのに、巳雪さんはまったく苦しそうな様子を見せなかった。それどころか、明らかに興奮していることが分かる。肉棒を味わい、その匂いをかいで、顔

を赤らめているのだ。興奮した巳雪さんからじっと見つめられる。その時間がどうしても我慢できなくて体をよじらせようとする。しかし、

「あああッ！」

がしっと。

有無を言わさぬ力強さで巳雪さんの両腕に力がこもった。それで私は悟る。逃げることなんてできない。私は獲物なのだ。蛇に巻きつかれ生きてまますしづつ丸飲みされるだけの小動物。

（食べられちゃうんだ……このまま巳雪さんに食べられちゃう）

そう思うとなぜか私の快感が増した。体がビクンと痙攣して電流じみた快感が全身を駆けめぐっていく。その瞬間を巳雪さん

が見逃すはずがなかった。

「ジュバアッ……じゅるうる」

「あひいんッ！」

動き出した。

肉棒を根本まで丸飲みしたまま舌だけが蠢いていく。肉棒全体が愛撫されている。唾液音が響き、それだけで体中に強すぎる快感が走った。

「じゅるっつばあッ！」

「ひいいんッ！」

過激になった舌使いで体が硬直する。

もはや立っていられない。ずり落ちそうになった瞬間、巳雪さんの両腕の力がますます強くなった。私の体が完全に持ち上げられ、足が地面につかなくなり、壁に背中を預けたまま抱きかかえられてしまった。

「み、白雪さん」

あひあひ言いながら彼女の名前を呼ぶ。私の体を持ち上げているのに、彼女はまったく余裕そうだった。なおも私の肉棒を根本まで丸飲みして、じっくりと堪能している。逃げられない。消化されていく。私は自分の運命を悟ると、そのまま射精した。

「ひいひいんっ！」

どっぴゅうううううッ！

びゅっぴゅううううッ！

勢いよく精液が飛び散る。

白雪さんの口の中に自分の子種が吸収されていく。あまりの快感で目の前がチカチカする。かすむ視界の中で、白雪さんが嬉しそうに笑うのが見えた。射精を促すために長い舌がさらに躍動していくのが分かる。

私は彼女の口内に子種を放出するだけの存在となり、終わらない射精を繰り返していた。

「あひいッ……ひいんッ……」

最後の一滴まで子種が奪われた。

もう射精できない。体の中から子種が根こそぎ奪われてしまったのだ。アヒアヒと悲鳴が漏れる。私が精子を隠していないことを確認した白雪さんがようやく肉棒を解放してくれる。私の体がどざりと畳の上に落ちた。息も絶え絶えになり頭上を見上げると、そこには私の子種を堪能して妖艶に笑う捕食者がいた。

「あああッ」

私の体が恐怖か歓喜か、どちらかでふるえた。

目の前の大きな体。私よりも発達した圧倒的な体がすぐそこにある。優劣差は明らかで、彼女がその気ならば私なんて簡単に絞め殺されてしまうだろう。あの大きな足が私の体に巻きついてきて体の骨という骨を碎かれてしまうのだ。そうして食べやすい状態にされた上で丸飲みが始まる。彼女の大きな体によって私の矮小な体が吸収されてしまう。それを妄想するだけで、なぜかビクンと快感が走った。

「ん」

巳雪さんが私を見つめてきた。

尻もちをついた私にむかって彼女がゆっくりと近づいてくる。至近距離。そこで巳雪さんが大きく口をあけて、見せつけてきた。

「う、あああッ」

巳雪さんの口の中にはたんまりと精液が溜まっていた。

これだけの量を放出したなんて自分でも信じられないくらいだった。明らかに自分の限界を越えてしまっていることが分かる。搾り取られてしまったのだ。目の前の女性によって強制的に奪われてしまった。

「ん」

欲情した瞳で満足そうに笑っている女性。

彼女はゆっくりと口を閉じた。

そして名残惜しそうに一度舌が動いた後で、喉がゴクンと鳴った。食べているのだ。あれだけ溜まっていた私の精液を捕食して、飲み込み、消化しようとしている。

「ふふっ」

笑った。

巳雪さんが再び私を見つめ、そして口を大きくひらいた。

「ひ」

口の中に精液は一滴たりとも残されていなかった。

すべて飲み込まれてしまった。大きくひらかれた口の中で蠢いている彼女の長い舌が、まるで次の獲物を狙っているように見えた。

「ごちそうさまでした」

ねっとりとした声で彼女が言う。

「やはり、大谷様の精液はとてもおいしいです」

「う、うう」

「すごく力がわいてくるのを感じます」

巳雪さんが嬉しそうに笑う。

彼女の言葉の意味は分からなかったが、確かに巳雪さんの生命力は増して見えた。あの甘い匂いがさらに強くなっている。そのすべてが私の興奮を刺激する。あれだけ射精したのに、私の肉棒が限界まで勃起してしまった。

「うふっ、すごい」

巳雪さんが私の勃起に気づく。

おそらく無意識だろう。彼女の舌が唇を舐めた。舌なめずりだ。獲物を前にして無意識に出た行動。それがなによりも彼女が捕食者であることを象徴しているように思えた。

「まだまだできそうですね」

「み、巳雪さん」

「大丈夫です。任せてください」

ゆっくりと彼女が私の耳元に顔を寄せてくる。

脳髓をとかすような甘い声で、

「たあっぷり、きもちよくしてあげますね」

その後、巳雪さんによる捕食が続いた。

私の肉棒は何度も丸飲みされ、時間をかけて舌で愛撫されて、最後にはなすすべもなく射精させられてしまった。放出した子種はすべて食べられ巳雪さんの胃の中に落ちていった。何度も何度もそれが続いていく。最後には自分が泣き叫びながら許しを懇願していたような気がする。すべて丸飲みにされて、捕食されて、消化されてしまう。巳雪さんに食べられた私は、そのまま気絶するように意識を失った。



朝目覚めると、昼だった。

2日連続で寝過ごした。

こんなこと今までの人生で一度もなかった。けれど仕方ないとも思う。昨日、あれだけ巳雪さんに、

「おはようございます、大谷様」

その声でびくんと体がふるえる。

布団のすぐそばで巳雪さんが上品そうに正座をしていた。そのまま深く頭を下げてくれる。そこまで礼を尽くしてくれると私自身が少しはマシな存在のように思えた。

「お、おはようございます」

なんとか言葉をひねり出す。

私のあいさつに、巳雪さんは明らかに安堵したように息を吐いた。

「申し訳ありません。また、私、やりすぎでしまって」

「い、いや、そんな、巳雪さんが謝るようなことではないですよ」

それは私の正直な気持ちだった。

夜の時間を受け入れたのは自分なのだ。嫌ならば断ればいいだけの話だった。それに、こんな美人にフェラをしてもらって、文句を言う男なんて存在しないだろう。

「お優しいんですね、大谷様」

憂いを帯びた瞳で言う巳雪さん。

あらためて見るととんでもない美人だ。これほどまでの美しい女性に射精をさせてもらうなんて、今後の人生で二度とないだ

ろう。

「あの」

巳雪さんの声でハッと我にかえる。

思わず巳雪さんに見ほれていたのだ。慌てて言った。

「す、すみません。巳雪さんがその、すごく、綺麗で、思わず見ほれてしまっ

た」
「そ、そんな、わたしなんて……大谷様のほうこそ頼りがいがある……素敵です」
なんだかわかせてしまったような気がして申し訳なくなつた。

部屋の中に妙に気まづい空気が流れる。

ちらっと時計を見るともう13時だ。明らかに寝坊だった。今日もこれから移動を開始するのは遅すぎるくらいだった。けれ

ど、さすがに出発しなくてははいけないだろう。私がそう考えていると、

「今日も泊まっていつてくください」

巳雪さんが切実そうな声で言った。

「え、いや、でも」

「ダメですか？」

ダメもなにもない。

そんなありがたい話しはなかった。けれどさすがに迷惑ではないのだろうか。3日連続でやっかいになるなんて、あまりにも非常識な気がした。

「ダメですか？」

巳雪さんが泣きそうになりながら続けた。あまりにも切実な様子がすごく印象的だった。その迫力には「だ、ダメじゃないです」と答えるしかなかった。ばああつと、

巳雪さんの顔に笑顔が咲いた。

「朝ご飯の準備をしますね」

「あ、でも」

「大丈夫です。大谷様はお休みになっていてください」

巳雪さんが立ち上がって、部屋から出て行く。

部屋の中に残された甘い匂いに、私の下半身がビギンッと勃起してしまった。

＊

なし崩し的に今晚もお世話になることになった。

おばあさんも嫌な顔一つせずには快諾してくれた。

いくらなんでも好意に甘えすぎだと思っ
たので、日中は家の手伝いをすることにし
た。

薪割り。

この家には電気もガスもないから薪が一
番の燃料源だった。毎日の薪割りは巳雪さ
んの仕事らしかったので、彼女の仕事を半
ば強引にやらせてもらったのだ。かなりの
重労働だったが、巳雪さんは毎日これをやっ
ているのだ。泣き言なんて言っていられなかつ
た。

「お客様にこんなことさせられません」

何度もそんなことを言ってナタをとりあげ
ようとしてきたのだが、私は頑として譲
らなかつた。おろおろとして泣きそうになっ
ている巳雪さんには申し訳なかつたが、こ

こは譲れない一線だった。

「……本当に大谷様はお優しいんですね」

さすがに諦めたのか、巳雪さんはじっと
私のことを見つめるだけになった。

なぜか彼女の顔が赤くなって、ぼおっと
放心したようになっていいる。なんだか照れ
くさくて仕方なかつたが、邪険にすること
もできない。私は巳雪さんに見つめられな
がら、汗をかいていた。

*

夜がくる。

足の加減もだいぶよくなっていたので、
風呂に入らせてもらうことにした。久しぶ
りの風呂だった。五右衛門風呂なんて初め

て入る。風呂の底に設置されたスノコみた
いな感触がとても新鮮だった。体に染みこ
んでくるお湯の感触に思わず「ふう」と声
がもれる。

「湯加減はどうですか？」

外から声がする。

巴雪さんだ。わざわざ私のために、薪の
番をして湯加減を見てくれていたのだった。
一番風呂なんて恐れ多いと断ったのだが、
今度は巴雪さんが頑として譲らなかった。
私はありがたく風呂に入らせてもらい、至
福の時をおくらせてもらっている。

「大丈夫です。すごくいい湯加減で」

「それならよかったです。湯加減に不足が
あったら遠慮なく言ってくださいね」

人を安心させる声。

巴雪さんの声を聞いているだけで、なぜ
か心がぼかぼかと暖かくなる。そして、下
半身が反応してしまふのを感じた。

（体が、期待してるんだ）

彼女の存在を前にすると、また気持ちよ
くしてもらえると条件反射で思ってしまう。
昨日も一昨日も、夜に搾り取られた記憶が
思い出される。しかし、

（今日はさすがに、断らないと）

彼女の誘いについてのしまえば、また明日
も昼まで爆睡してしまうことになる。連休
は残り少なくなっていたので、明日には下
山しないと連休明けの会社に間に合いそう
になかった。

「気合いを入れないとな」

顔をバシヤンと叩く。

しかし私の決意は次の瞬間には粉々に碎かれることになった。

「失礼しますね、大谷様」

風呂場のドアがひらき、巳雪さんが入ってきた。

タオルで胸と秘所だけを隠した格好。その大きなおっぱいの谷間に目がくぎづけになる。巳雪さんの大きな体が、とんでもない迫力で迫ってくるようだった。

「み、巳雪さん？ ど、どど、どうして」

「お背中、流しに参りました」

「い、いい、いや、そんなの自分で」

「ダメです。きちんと洗わないと、ダメです」

なんだかやけに強情だった。

まるで子供みたいだ。理性的で大人な女

性である巳雪さんにこんな一面があるなんて発見だった。そのギャップがとんでもなくかわいく思えた。

「そ、それじゃあ、お願いします」

私の言葉に満面の笑顔が咲く。

この笑顔をいつまでも眺めていたい。心の底からそう思った。

「失礼しますね」

艶やかな声。

今までの夜と同じ言葉。

彼女の手がゆっくりと私の背中に這っていく。その感触はどこまでも心地よいものだった。大事に大事に、巳雪さんが私の背中を撫でていく。

「たくましい大きな背中ですね」

背後から巳雪さんが言う。

「前も洗いますね」

彼女の両手が私の体の前にまわされる。

胸板に10本の指が絡みついてきて、泡立てた石鹼が塗りたくられていく。胸から腹へ。ゆっくりと進む手の蠢きが一点に集中していく。その先——そこには私の肉棒があった。

(また、搾り取られる)

その予感が恐怖と快感を呼び起こす。

断らなければならぬ。

そう分かっているでもできなかった。

巳雪さんの両手が肉棒に迫る。はあはあという荒い息づかい。それは自分があげているものなのか、巳雪さんがあげているものなのか。背後からぎゅううっと抱きしめられる。身動きを封じられて背後から——

——巳雪さんの両手が勃起した肉棒に迫って

——そして止まった。

「ふう——フウッ——」

背後には息を荒くしている女性がいた。

肉棒一步手前の虚空で止まった両手がプルプルとふるえている。なんとか自分を押しとどめていることが分かる。なにが彼女をそこまで追いつめているのか。それが分からず疑問に思っていると、彼女の両手のふるえが止み、すうっと引いていった。

「あ、あとはご自分で」

ふるえた声で巳雪さんが言った。

そのまま勢いよく立ち上がり彼女が私に背中を見せた。風呂場から逃げるように出て行くうとしてしている。

「み、巳雪さん」

「……………」

「そ、その、ありがとうございます」

巳雪さんがゆっくりと顔だけ振り返って
くる。

憂いを帯びて泣きそうになっている彼女は、
ひきつりながらも笑っていた。

＊

自分で体を洗い、客間にもどる。

あぐらをかいて畳に座る。

どうにも巳雪さんのことが気になって仕
方なかった。

一昨日も昨日も、そしてさきほども。

彼女の精液に対する欲求が不自然なもの
に思えてならなかった。なぜあれほど巳雪

さんは私なんかの体を求めるのだろうか。
その疑問に対する答えは意外な所からもた
らされることになった。

「大谷様、今、よろしいですか」

おばあさんだ。

客間に現れた老婆が、申し訳なさそうに
しながら、居間に来てもらえないかと頼ん
できた。

おばあさんの後をついていき、居間で囲
炉裏を囲んで座る。

灰の中で薪が燃えている。その炎のあか
りがどこか幻想的な雰囲気や空間に与えて
いた。天井が高くそこは暗闇が支配してい
る。そんな場所で、おばあさんが真剣そう
な表情を浮かべて、突然言った。

「巳雪をもらってくださらんか」

「え？」

「巳雪を妻として迎えてくださりませんか」

意味がよくわからない。

妻？

つまりは結婚ということだ。

誰と？

もちろん、私と巳雪さんが結婚するとうことだった。

私は慌てた。

「な、ななな、なんでそんなことに」

「あの娘には殿方が必要なんじゃない。生きて

いくために、殿方が必要なのです」

真剣な表情を浮かべて老婆が言う。

厳かに、おばあさんの口から、巳雪さんの秘密が語られた。

「この一帯で生まれるオナゴの中には、特

別な体質をもって生まれる娘がおる。殿方の精子を栄養とし、それを活力として生きていく。そういうオナゴじゃ」

「え？」

「そのようなオナゴは白蛇様の落とし子とされ、集落でも重宝された。集落の指導者として精神的にも肉体的にも崇拜の対象となり、白蛇様そのものとして集落を導いてきた。それが可能だったのは、殿方の精液を力とする体質のためじゃった」

やはり意味が分からない。

男の精液を力にする？

それではまるでサキュバスだ。

サキュバスなんて空想上の生き物のはずだった。そもそも、精液を活力にすることなんて不可能だと思うのだが——そこま

で考えて唐突に思い至る。最初は枯れ果てた姿だった巴雪さんが、私の精液を捕食した後、に生命力にあふれた姿になったこと。その姿はまさしくサキュバスそのものではないか。

「ふう」

おばあさんがため息をついた。

過去を思いかえすような遠い目をしてから老婆が続けた。

「それも昔のこと。あの子が生まれたころには既に集落などなく、人々は霧散してしまっていた。母親はあの子を生む際に亡くなった。巴雪も結婚して家を出たが、うまくいかず、何度もこの朽ち果てた家に戻るようになってしまったのじゃ」

そうそう。

おばあさんは「大事なことを言い忘れていた」と前置きしてから、

「巴雪は3度結婚しております。そのすべてで夫と死別してしまっただ。子はいない。もう30歳じゃ。おそらく、これが最後の機会じゃろう」

「……………」

「大谷様のような立派な人に不釣り合いとは思いますが、どうか巴雪をもらってくださいらんか」

シーンと静まりかえった。

薪がはぜる音だけが聞こえる。炎がゆらゆらと揺れていて、おばあさんの姿がかげろうのように揺らいでいた。

「も、もらってくださいって、そんな」

私は慌てながらも言った。

「そんな、物みたいなこと、お、おかしいですよ。だ、大事なのは、巳雪さんの気持ちでしょ？」

自分が何を喋っているのか分からなくなる。

それでも止まらなかつた。

「わ、私なんてもう36です。これまで女性と付き合ったことすらありません。控え目になって私の容姿は整っているわけではないし、身長だって低いほうだ。こんな私を、巳雪さんのような魅力的な女性を選ぶわけがないでしょう」

いっきに語ってハアハアと息を荒くする。じっとおばあさんが私を見つめてきた。

「巳雪の気持ちは分かっております」

「え？」

「さきほど風呂場で、巳雪は大谷様を襲わなかつたでしょう」

どくと心臓が脈打つた。

「あの子にとって殿方の精液は命をつなぐためにも重要なものなのです。それを奪わなかつた。大谷様のことを思つてとどまつたのです。それが巳雪の気持ちです」

確信をこめて、おばあさんが言った。

さらに、

「そうでしょう、巳雪」

居間のふすま。

そちらに顔を向けて老婆が言うのと、ふすまがひらかれ、廊下に正座をして待機していた巳雪さんが真っ赤な顔をして現れた。

「……………」

巳雪さんは無言だった。

顔を真っ赤にしながら、瞳をうるうると潤ませて私のことをじっと見つめてくる。いくら鈍感な私でもその視線の意味ぐらいは分かった。

(本当に……私なんかでいいのか)

そんな気持ちや頭をぐるぐるとまわる。

どう考えても不釣り合いだ。こんなうだつのあがらない中小企業の万年平社員なんかと巳雪さんが釣り合うわけない。

(だけど)

どうしたって惹かれている。

どんなに言い繕ったところでそれが真実だった。

理性的な雰囲気と顔を真っ赤にして照れる時のギャップや、私なんかのことを気遣ってくれる優しいところなんかも、とてもと

ても良いと思う。頭の中で無意味な言葉がおどっている。私は頭が沸騰しそうになりながら、いつの間にか口をひらいていた。

「み、巳雪さん」

「は、はい」

「私と結婚してください」

巳雪さんが目を見ひらく。

その瞳がすぐに潤む。

ぼろっと涙がこぼれた。

その表情はとても美しかった。

「はい。末永く、よろしくお願いします。旦那様」

那樣



客間に戻った。

巳雪さんも一緒だった。

障子を閉める時のぽしんっという音がとても大きく聞こえた。私と巳雪さんは客間に敷かれた一つの布団を前にして立ちすくんでいた。

「あ、あの」

巳雪さんが私にむかって、

「本当にわたしなんかでいいんですか？」

「も、もちろんですよ。冗談でプロポーズなんてしません」

「で、でも、さきほど話しを聞いてましたよね？ わたしの変な体質のこと。それに、これまで3度も結婚したことがあることも」
大きな体を小さくして巳雪さんが言った。
不安に思っている。

それがひしひしと伝わってくる。私はド

キドキしながら、なんとか目の前のかわいらしい女性に心を落ち着けてほしい一心で、優しく、彼女の体を抱いた。

「あ」

巳雪さんの口から甘い声が漏れる。

こちらを驚いた表情で見下ろしてくる巳雪さんにむかって宣言する。

「幸せにしてみせます」

精一杯の虚勢をはって、

「だから、そんなこと、気にしないでください」

正直なところ、巳雪さんの体質のことも、3度の結婚のことだって、自分の中でうまく消化できてはいなかった。けれど、おそらく時間が解決してくれるだろう。絶対にうまくいくというおかしな自信が、体の底

から生まれていた。

「旦那様」

瞳をうるませていく巳雪さん。

彼女はそのままゆっくりと顔を近づけてきて、勢いよく私の唇を奪った。

「んんッ、じゅばあッ！」

当然のように舌が入ってくる。

蛇みたいな長い舌。それが私の口内をひたすらに責めてきた。

執拗にねっちこく、ずっと続き、私はダメになる。

(きもちよすぎるうううッ)

まるで大切なものを唇から奪われているみたいだ。私はすぐに立っていられなくなり、巳雪さんと一緒に布団に倒れた。

「じゅばあ……じゅるうう」

布団に仰向けに倒れた私に覆いかぶさるようにして、巳雪さんが接吻を続けてくる。彼女の大きな体によって私の小さな体が圧倒され、激しいディープキスだけでメロメロにされてしまった。

「旦那様」

唇を放した巳雪さんが言う。

「明日下山しなければならぬので、今日は射精はなしにしましょう」

「は、はひ」

「その代わり、いっぱいキスしたいです。旦那様の頭がバカになっちゃうくらいに、わたしの本気キスできもちよくしてさしあげます」



もう頭はバカになってる。

とろとろに溶けた瞳で頭上の巳雪さんを見上げるしかない。憂いを帯びた瞳で、幸せそうにほほえむ女性。捕食者の無意識な舌なめずりの光景に目がくぎづけになり、次の瞬間には唇を奪われる。

「あひい……ひい……んんッ」

ただただ喘ぎ声をもらすだけ。

巳雪さんの大きな体にずっしりと押し潰されながら、私はひたすらに喘ぎ、快感にふるえるだけになる。永遠と続くディープキス。そのまま意識を失うように気絶した。

*

「旦那様」

声が聞こえる。

私の意識は眠っていて、彼女の声だけが聞こえた。

「わたしの旦那様」

頭が撫でられている。

優しく、宝物を扱うように。

「愛しています」

額にキスをされる。

それを感じた瞬間、あまりの多幸福感で今度こそ眠りについた。



翌日、下山の準備をすまして、私たちは玄関の外に立っていた。

巳雪さんが、見送りに出てきてくれたお

ばあさんと別れを惜しみ、じっと見つめ合っている。

一緒に暮らしましょうという私からの提案は、昨日のうちにおばあさんから断られていた。新婚夫婦の家ではお互いに気兼ねするだろうし、自分はこの生活が気に入っているからということだった。

「お元気で、巴雪様」

「お世話になりました」

最後のあいさつ。

二人は涙を流して別れた。

私と巴雪さんは、ゆっくりと山の中に入っていく。まだ涙を流している巴雪さんの手をぎゅっと握った。

「大丈夫。いつでも会いにくればいいんです」

「……はい」

「これから、よろしくお願いします」

巴雪さんが涙をぬぐう。

そして満面の笑みとなって言った。

「はい。こちらこそよろしくお願いします。」

旦那様」

第二章

新婚生活が始まった。

それは夢のような毎日だった。

私達夫婦は、これまで私が暮らしていた一人暮らし用のアパートで生活を始めていた。プライベートなんて何もないような家だったけれど、巳雪さんに不満はないようだった。仕事が忙しく、お世辞にも綺麗とはいえない家の中を、巳雪さんはせっせと掃除してくれた。今では見違えるようになった家の中で、巳雪さんはいつもニコニコと笑っている。

(洋服だと、すごくあかぬけて見えるな)

部屋の中央に置いたテーブルを囲うよう

にして、私と巳雪さんは座っている。

隣の巳雪さんは山の中とは違って洋服を着ていた。少し古めのデザインなのに、巳雪さんが着るとオシャレに見えた。あまりにも綺麗すぎて、私は思わず巳雪さんをぼおっと見つめてしまう。甘い匂いがずっと私の鼻孔をくすぐっていた。

「どうしましたか？」

隣の巳雪さんが言う。

私は顔を真っ赤にして、

「いや、その、今さらですけど、巳雪さんは洋服も似合いますね」

「そうですか？」

「はい。やっぱり巳雪さんが美人だから、着るものぜんぶ似合っちゃうんでしょうね。すごく、なんとというか、綺麗です、はい」

私の言葉に今度は巳雪さんがカアアッと顔を真っ赤にする。その恥ずかしがる様子もとてもかわいくて、私は「ああ、この人を幸せにしたい」と自然と思った。

*

夜がくる。

巳雪さんの時間だ。

二人でシャワーを浴びた後、寝室に敷いた布団の上で、今日も私は搾り取られる。

「んっじゅっばあ……じゅるう」

親鳥の口を求めるヒナ鳥のように、巳雪さんが執拗に私の唇を奪ってくる。

彼女の大きなおっぱいが私の胸をずっしりと潰し、彼女の長い足が私の短い足に絡

まされる。まるで、彼女の大きな体によって磔にされてしまったような格好。身動きがとれない状態で、興奮した巳雪さんからのディープキスでバカにさせられる。

(溺れる……溺れ……)

巳雪さんのキスは執拗だった。

獲物を逃がさないと強く決意していることが分かる。彼女の長い舌が縦横無尽に私の口内を蹂躪し、獲物である私を快感の暴力で殴ってくる。巳雪さんの口から送られてくる唾液をずっと飲み込んでいく。なぜか彼女の唾液を飲むと体が麻痺したようになる。あまりにもその量が多いので、激しい舌使いとあいまって満足に息も吸えない。(だ、ダメだ)

少しでもキスから逃れようと、かろうじ

て動かせる両手を使って巳雪さんの体を押し
しのけようとす。けれど、彼女はそれす
ら許してくれなかった。

「あ」

がしっと、巳雪さんの手が私の手をつか
む。

その力強さの前に私の体がビクンとふる
えてしまう。

そのまま、巳雪さんはゆっくりと私の両
腕を持ちあげ、私の頭の上で床に縫いつけ
にしてしまった。ちょうど万歳をする格好。
巨体による押し潰しは継続されているので、
これで私は文字通り、身動きすべてを封じ
られてしまったのだ。

「逃げちゃダメです」

至近距離から見下ろされる。

「もっともっと、きもちよくなってくださ
い」

「み、巳雪さん」

「わたしの前ではとり繕わなくていいんで
す。どんなに情けない姿になっても幻滅な
んてしませんから。わたしのキスで、旦那
様の理性、ドロドロに溶かしてあげます」

彼女の美しい顔が迫る。

その理性的な顔からは想像もできないほ
ど大きな口があき、中で蠢く長い舌が見え
る。ああ、今から食べられてしまうんだ。そ
う思っていると、そのとおりに私の唇が奪
われ、巳雪さんの長い舌が勢いよく進入し
てきた。

「あひん……ひいん……」

喘ぎ声が漏れる。

激しく巳雪さんの舌が蠢いていく。

まるで私のことを舌で溶かして食べようとしてみるみたい。巳雪さんの巨大なおっぱいによって体を潰され、柔らかな肉布団に覆われながら、熱烈なキスだけを永遠と施されていく。

「とても素敵なお顔になりましたね、旦那様」

久しぶりに私の唇を解放した巳雪さんが言った。私の体に馬乗りになりながら、ニッコリと慈愛のこもった聖母みたいな表情で、こちらを見下ろしてくる。

「おめめがトロンとしています。とても素敵ですよ？」

彼女の手が優しく私の頭を撫でた。

それだけで口から「あひん」という情けな

い声が漏れる。巳雪さんが嬉しそうに笑った。

「もっともっと、きもちよくしてあげます」
彼女の美しい顔が近づく。

また食べられてしまう。そう思って目をぎゅっとつむると、彼女の唇が私の耳元にキスをした。

「チュッ」

「あひんッ！」

その音と感触に悶える。

それが連続した。彼女が私の体中にキスを始めてしまう。

「チュウッ！ ビュチュッ！ プチュッ！」

「あひんッ！ あんんッ！ ひいッ！」

首筋からはじまって鎖骨や胸板。

お腹や腕にまんべんなくキスの雨が吹き

荒れる。

巳雪さんの肉厚な唇がぱくりと私の体に食らいつく。その柔らかな感覚に体が嫌でも反応してしまう。しかも、一瞬のうちに彼女は私の体を舐めながら吸引して、キスマークをつけてしまうのだ。私の体に捕食の証拠が刻まれていく。

（あああッ！ 刻まれてるうううッ！ 私が誰のものか分かるように巳雪さんのキスマークがああッ！）

自分の物に名前を書くようなものだ。

上半身が終わって次は下半身へ。巳雪さんが体をスライドさせ私の股の間に体を差し入れてから、私の足にチュッチュッとキスマークを刻んでいく。それを刻まれるごとに私の体に信じられないほどの快感が走

る。快樂地獄。巳雪さんが飽きもせず、永遠と私の体をついばんでいく。

「ふふっ、キスマークだらけになりましたね」

ようやく満足した巳雪さんが言った。

私の体は彼女のキスマークで覆い隠されてしまっていた。彼女の唾液まみれになった体で「あひん」と悶えるだけになる。なぜかそのキスマークがつけられた部分からは快感の余韻が消えてくれない。まるで今もまだキスをされ、体を舐め回されているような、そんな快感がずっと続いている。

「わたしの唾液は媚薬入りなんです。なのでこうして全身唾液で塗りたくると、すぐきもちよくなれるんですよ」

「あひん……ひいい……」

「旦那様にはいつも最上の射精体験をしてもらいたいのです。このまま射精すれば、頭がバカになるほどきもちよくなれるはずです」

巳雪さんがニッコリと笑った。

その優しさの究極みたいな笑顔が私には恐ろしく見えて仕方なかった。

「いきますね？」

巳雪さんが口を大きくあけた。

その口の内部がまざまざと見せつけられる。整然と並んだ白い歯と、健康そうな歯茎、そして長く肉厚な舌がウネウネと蠢いている様子が目の前に見える。肉棒間近まで近づけられた彼女の美しい顔と迫力満点の舌。それはまるで白い大蛇が獲物を前にして舌なめずりをしているようだった。

「ふふっ」

笑った巳雪さんが、ペロリ、と私の肉棒を舐めた。

竿の根本から亀頭にかけて、彼女の長い舌が這っていく。

「あひんっ！」

声が漏れてしまう。

白蛇が瞳を細くして笑う。

何度も何度も、まるでアイスクリームでも舐めるみたいに、しつこく、執拗に、巳雪さんが私の肉棒を舐めていく。

「んふっ♪」

巳雪さんはずっと笑顔だ。

情熱的に舐めながら、ねっとりとした視線で私の痴態を観察している。その瞳に抵抗するために、舐められても反応しないよ

うに努力するのだが無駄だ。彼女の舌の前ではどんな我慢も骨抜きにされてしまう。まるで快樂神経そのものが舐められているみたい。その長い舌が肉棒を這いまわるたびに悶絶してしまった。

「ぺろぺろ……じゅるうっ……」

「ひいッ！ あひんッ！」

唾液音と喘ぎ声。

私という生物が、より強い巨大な大蛇によって食べられていく。限界が近い。それを目の前の女性が逃すはずがなかった。

「ガッボじゅるるうッ！」

「いっぎいいいいいいッ！」

丸飲みされた。

根本までいっきに。

彼女の大きな口が私の肉棒をすべて飲み

込んでしまったのだ。彼女の喉奥のなま暖かい感触。私の全存在が一口で丸飲みされてしまい、私はなすすべもなく射精した。

「あひいいいいいッ！」

どっびゅううううううッ！

びゅっびゅうううううッ！

盛大な射精を巳雪さんの喉奥にむかって放出していく。すさまじい射精。脳天からつま先まで快感の電流が走って射精が終わらない。

(し、死んじゃうううう)

声も出せない快感の嵐の中で、私には巳雪さんをさがるように見つめることしかできなかった。

私の肉棒を丸飲みしながらも顔色一つ変えていない美しい女性を見つめ、もうやめ

てくれと必死に懇願する。

「んふっ」

巳雪さんが私の視線にきづいた。

怯えきつた私の視線をがちりと真正面から受けきって、にっこりと笑った女性が、私にとどめをさすことにしたらしい。

「ズボオボオオオッ！」

「いっぎいいいいッ！」

びゅっっびゅっっびゅっっ!

強烈なバキューム。

ただでさえ凄まじい勢いだった射精がさらに強くなる。吸われている。生まれたばかりの精子たちが強制的に吸い尽くされている。私の中の何か大事なものが精液に変換されて、それごと吸引されているような錯覚。意識が朦朧として、よく分からなく

なり、時間の経過がなくなった。唾液音と時折漏れる獲物の喘ぎ声だけが聞こえてくる。

「ずちゅあッ……んふっ……じゅるるるッ」

きづいたら射精は終わっている。

腰が溶けてなくなつたと確かに感じる。チカチカする視界で下半身に目をやると、そこにはまだ私の肉棒を頬張つたままの巳雪さんがいた。

「んふううッ♪」

甘い声をあげながら、彼女は執拗に肉棒を責めたてていた。

もう精子を出さなくなつた肉棒を叱りつけるような責め。肉棒の根本まで丸飲みしてから、頬をすぼめながら亀頭までしごきあげてしまう。ゆっくりとしたピストンが

連続して続く。執拗に執拗に。尿道に残った精子すら捕食する。一滴たりとも逃さない。そう決意しているみたいにしつこく巳雪さんは私の肉棒を頬肉で責めたてていた。

「あひいんッ」

最後の一滴が吸引され、すべてなくなる。その瞬間、ようやく巳雪さんが私の肉棒を解放した。

「んふっ」

頬を膨らませた巳雪さんが笑う。

彼女はそのまま、くちやくちやくと味わい始めた。腫をトロンとさせて、体を時々震わせながら、私の放出した精液を舌先で転がして堪能しているのが分かる。彼女の全神経が舌に集中しているのだろう。目の前に私がいることすら忘れてしまったように、

彼女は搾り取った精子に夢中だった。

「み、巳雪さん」

思わず声をかける。

それに反応した巳雪さんが、妖艶な表情で笑った。彼女の顔が近づいてくる。真正面から体を抱きしめられ、巨大なおっぱいが私の薄い胸板を侵略してぐんにやりと潰した。目の前には、頬をふくらませた美しい女性の顔がある。

「んふっ」

笑って、彼女が大きく口をあけた。

その中には大量の精液が溜まっていた。巳雪さんの唾液と溶け合った自分の敗北の証拠。それをまざまざと見せつけられ、私の体がピクンとふるえた。

「んふううッ」

目の前の女性が口を閉じる。

名残惜しそうに最後に一度舌で転がしてから、彼女はゴクンと精液を飲み込んだ。その嚙下する音と、喉が蠢く様子を目の前で見せつけられる。一度。たった一度の嚙下で、彼女は文字通り、私の大量の精液を丸飲みしてしまったのだ。

「ふふっ」

笑った彼女が口をひらく。

さきほどまでであった大量の精液が一滴たりとも残らずに消えていた。飲み込まれてしまったのだ。吸収されてしまった。自分のDNA情報たちが捕食され、巴雪さんの体の中で消化されしまったのだ。その変化は劇的だった。

「あああああッ！」

私を抱きしめている体。

巴雪さんの女体に精力がみなぎっていくのが分かった。ただ触れているだけで射精しそうになる。甘い匂いがさらに増して、それを嗅ぐだけでビクンビクンと体がふるえる。そんな痙攣すら堪能しようと巴雪さんがぎゅううっと私の体を抱きしめてくる。捕まえた獲物は逃さない。私の精液を食べ成長した巴雪さんが、いつまでも私の体を抱きしめて放さなかった。

「ごちそうさまです、旦那様」

巴雪さんが笑って言う。

発情しきった様子は影にひそみ、いつもの憂いを帯びた控えめな女性が戻っていた。私は脱力しながら、極上の肉布団に生き埋め状態にされて、彼女の声を聞く。

「とてもおいしかったです。本当に、とても」

「あひいいい」

「体が喜んでるのが分かります。活力が体の底からみなぎってきて、力が増しているんです。ふふっ、本当にすごい」

話しかけながら、彼女は私の頭を優しく撫でてくれる。その感触だけでダメになる。目をトロンとさせて、されるがままになっ
てしまった。

「旦那様、大好きです」

彼女の片手が私の下半身に伸びた。

すべてを出し切って縮んでしまった肉棒をクチャクチャといじり始める。その指使いで私の体がピクンとふるえた。

「残りの時間はずっと気持ちよくしてあげ

ます」

上品に笑って、

「精子が出なくてもイクことはできるんですよ？ 夜通し、旦那様にご奉仕させていただきますね」

始まる。

しつこく執拗に続けられる愛撫。

彼女のご奉仕によって、私の体が強制的に発情させられ、開発されていく。夜通し、私の喘ぎ声がやむことはなかった。



夜がすぎれば朝がくる。

太陽の光で目覚めると、トントントンと包丁をふるう音が聞こえてきた。これまで

長年ずっと一人だったので、朝起きた時に誰かがいるという感覚は妙なものだった。けれども心が暖かくなるのを感じた。

「おはよう、巳雪さん」

「おはようございます、旦那様」

台所で朝ご飯の準備をしていた巳雪さんがにっこりとあいさつをしてくれる。

エプロン姿の彼女はどこまでも家庭的な女性にしか見えなかった。とても夜通し私のことを快樂地獄におとしこみ、さんざんに精液を搾り取ってきた女性と同一人物とは思えない。

（体がめちやくちやに疲れてるな）

自分の体調を確認してそう思う。

毎日、さんざんに搾り取られているのだ。体力の限界がおとずれても仕方のないこと

だろう。

（でも、だいぶ慣れてきたのかも）

山の中で最初に出会った時には昼まで寝過ごしていたが、今ではそのようなこともなくなっていた。体が順応しているのだろう。彼女に精子を提供するために最適な体になっている……いや、そのような調教されている。それが分かった。

「いただきます」

食卓に並んだ食事を前にして手をあわせる。

朝からとんでもない量だった。

焼き魚や納豆など、たんぱく質が豊富な食材が並ぶ。もともと私は小食なのだが、巳雪さんがつくってくれる食事はどれもおいしくて、全部食べることができた。昼ご

飯も彼女がつくった特性の弁当。栄養豊富なご飯を食べていることも、あれだけ毎日搾り取られても私の健康が損なわれない理由なのかもしれない。

「おいしい」

思わず声もれる。

それを聞いて巳雪さんが嬉しそうに笑った。

「おかわりはたくさんありますからね」

「ありがとうございます。お米もすごくふっくらして甘みがありますね」

「土鍋で炊いてみました。本当なら薪で炊いたほうがもっとおいしくなるんですが」

確かに巳雪さんの山の中の実家で食べたお米はおいしかった。けれど目の前にお米だっただけでまったく引けをとらない。私は

これまでの小食が嘘だったようにパクパクと食べていった。

「ふふっ」

そんな私のことを巳雪さんが幸せそうに見つめていた。彼女の箸はまったく動いていなかった。それもそのはずで、巳雪さんの目の前にはほんの少しのご飯しかないのだ。

「あの、巳雪さん」

「はい」

「本当にそれだけで足りるんですか？」

いつもながら疑問に思う。

彼女はほんの少しの食物しか口にしなければ。私だけおいしいご飯をたくさん食べさせてもらって、なんだか申し訳ない気持ちになる。

「お氣遣いありがとうございます、旦那様」
にっこりと巴雪さんが笑って、

「けれど本当にこれで大丈夫なのです。恥
ずかしながら、普通の食事では十分な栄養
をとることができない体なので」

それに、と。

巴雪さんが自分のお腹を片手でさすりな
がら、

「昨日の夜、十分にお食事はいただきまし
た。旦那様から、とってもおいしい食事を」

ねっとりと絡みつくような甘い声色。

彼女の視線もトロンと溶けたようになって
目の前の私のことを見つめてくる。おそ
らく昨日の夜のことを思い出しているのだ
ろう。甘い匂いが強くなり、明らかに発情
しているのが分かった。

「そ、それなら、いいんですが」

しどろもどろになって私は言う。

彼女が嬉しそうに笑いながら、そんな私
のことを見つめてくる。私は盛大に勃起し
てしまった肉棒を納めようと無駄な努力を
しながら、朝ご飯を食べていく。すぐに食
べ終わり、身支度を整えたら、もう出社の
時間だ。

「行つてらっしゃいませ、旦那様」

玄関。

床で膝をつき、三つ指をついて頭を下げた
巴雪さんが言う。朝の日課になった光景。そ
んなことしなくてもいいですといくら言っ
ても巴雪さんは聞いてくれなかった。しか
も朝の日課はこれだけではないのだ。

「……旦那様」

立ち上がった巳雪さんが憂いを帯びた瞳で私のことを見下ろしてくる。

情念に満ちた欲情しきった瞳——夫を亡くしたばかりの未亡人だって浮かべることができない憂いを帯びた表情で見つめられる。それだけで私は身動きすらとれなくなる。巳雪さんが近づいてくる。そのまま、ぎゅううっと、抱きしめられた。

(や、やわらかいいい)

何度抱きしめられても慣れることはない。身長差から、ちょうど私の顔のあたりにある巳雪さんの爆乳。色白でありながら野性味にあふれた乳肉の暴力が、容赦なく私の理性をブン殴ってくる。力強い抱擁。しかも、それだけではない。

「旦那様、んんッ」

巳雪さんが自分の体をぐりぐりと動かす。その極上の女体を私の体にすりつけてくるのだ。おっぱいだけではなく、彼女のお腹やムチムチの太もも、ひきしまったふくらはぎが私の体におしつけられる。さらに激しく、巳雪さんの長い足が私の股の間に押し入ってきて、絡めとられてしまった。まるで白蛇に捕まってとぐろをまかれてしまった獲物のよう。完全密着のまま、執拗に、執拗に、巳雪さんが体をすりつけてくる。

「あひん……ひいん……」

こうなってはもうダメだ。

私は巳雪さんの匂いとフェロモンで喘ぐだけになる。おっぱいに顔を生き埋めにされながら全身を愛撫される。これが朝の日

課のマーキングだった。自分の匂いを私につけてほかの雌が寄りつかないように警告しているのだ。私が一人で外出する時には、彼女は常にこうして執拗にマーキングした。こんなことをしなくても私のことを狙う女性なんているわけがないのに、巳雪さんは容赦をしなかった。朝、出勤前になるとひたすら私のことを抱きしめ、自分の匂いとフェロモンをすりつけてくる。こうされると一日中巳雪さんに抱きしめられているみたいに感じられて、ずっと発情したままになってしまう。それは困ると言っても巳雪さんは聞いてくれない。濃厚で従順な良妻賢母の巳雪さんではあったが、私のことを独占するということにかけては、一切の妥協をしてくれなかった。

「旦那様」

私の顔面がようやく乳肉生き埋め天国から解放される。

おっぱいの谷間に首をすっぽり生き埋めにされながらも、顔面だけが外に出される。久しぶりの新鮮な空気。さきほどまで吸っていた甘い媚薬じみた巳雪さんの体臭の余韻を感じながら、私はハアハアと息を荒くするしかない。

「好きです」

しつとりと艶やかな色気をふりまいて、巳雪さんの顔が近づいてくる。

私の視界に彼女のぷっくらとふくらんだ唇が迫る。

彼女がしようとしていることに気づいて慌てた。それはダメだ。朝からそんなこと

をされてタダですむわけがない。体をじたばた暴れさせて逃げようとする。けれどもビックともしないのだ。彼女の大きな体に絡め取られて、情熱的に抱きしめられ、首をおっぱいの間で挟まれてしまったのは、逃げることもなでできるわけがないのだった。

「あ、だ、だめ」

生娘みたいな声をあげる。

それには無頓着に巳雪さんが大きく口をあけた。その中で蠢いている長く肉厚な舌が見えた瞬間、私の唇が捕食された。

「あひひひひッ！」

思わず声が漏れ、体が快感で痙攣する。

巳雪さんの唇が私の唇に押しつけられる。そのぷっくらとした感触だけでもダメなのに、すぐに彼女の長い舌が蹂躪を始める。巳

雪さんの舌が繊細に動いて私のきもちのよいところを重点的に刺激する。すでに私の口内のことは巳雪さんのほうが詳しい。すぐに体がビクンビクンと痙攣するだけになり、私の口からは「あひん、あひん」と喘ぎ声があがった。逃げようとする意識すら捕食されてしまい、私の体はダランと脱力して、白蛇に抱きしめ潰され、永遠とペロチューで犯されるだけになる。



「ずっばおとおッ！」

抵抗がなくなったのをいいことに巳雪さんの暴走が終わらない。

私の舌が勢いよく吸引され、巳雪さんの口の中に引きずりこまれてしまう。どろりと濡れた彼女の口の中。その底なし沼みたいな巳雪さんの口の中で、舌がフェラされていく。頬肉と頬肉が私の舌を左右から挟み込んでドロドロに溶かす。彼女の舌が私の舌を舐めとってクネクネと蠢く。その感触で頭がバカになり、体が完全に脱力した。ずりおちそうになる体を巳雪さんに強引に抱きしめられながら、永遠と唇を奪われる。

「……んんッ」

名残惜しそうに。

巳雪さんがゆっくりと唇を放した。

私と巳雪さんの口と口に涎の橋がかかる。

激しいベロチューの余韻。巳雪さんが、その大きなおっぱいで私を潰しながら、至近距離から私の惚けた顔を見下ろしている。憂いを帯びた表情がどこまでも妖艶だった。

「……旦那様」

ねっとり。

私の脳髓を溶かしてしまうような甘い声で、

「はやく帰ってきてくださいね」

「ヒインッ」

「帰ってきたら、すぐに続きをしましょう」

「あひん……ひいッ……」

「今のように加減をしたキスではない、わたしの本気のディープキスで、旦那様のこと夢心地にしてさしあげます」

最後にぎゅうううと抱きしめられる。私は巳雪さんの声と体で骨抜きにされて、歩けるように回復するまで、そのままずっと彼女の大きな体に抱き潰されたままだった。



会社でも巳雪さんのことだけを考えている。

仕事途中でも関係がない。

少しでも集中力がとぎれば、巳雪さんの過激な責めを思い出してしまう。今朝のディープキスの感触は今も唇に残っている。かなり時間がたっているのに、ただよってくる巳雪さんの匂いによって、ずっと興奮

しっぱなしだった。

(体中に……巳雪さんの匂いが……)

どんな極上の香水だって、ここまでいい匂いはしないだろう。

嗅ぐだけでトロンと麻痺してしまうような甘い匂い。それが私の体中に付着していて、ずっと私の理性をドロドロに溶かしていく。まるで今も巳雪さんに抱きしめられているような感覚。私は昼休みになっても消えてくれない巳雪さんのフェロモン地獄によってずっと興奮していた。

「……昼食にしよう」

巳雪さんに準備してもらった弁当箱をひらく。

なんとというか豪華な食事の宝石箱といった感じだ。たんぱく質が中心ではあっても

きちんと栄養バランスが考えられているのが分かる。鉄分多めのほうれん草のお浸しなんて湯で加減も味つけもぼっちりだ。魔法瓶にはシジミの味噌汁も入っていて、疲れた体にはありがたかった。

「おいおい、精がつくもんばかりじゃねえか」

ダミ声の男の声がして振り向く。

そこには同期の郷田が立っていた。

社内にいる数少ない友人。年相応に腹が出て貫禄が出てきた男が、私の弁当箱をのぞいて感心したように笑っている。

「今でもまだ信じられねえよ。おまえが結婚したただなんてな」

隣の席に勝手に座って郷田が言った。

テカテカと油ぎって日焼けした肌がいま

いましい。私は黙々と食事を続けながら、「なにを今更。婚姻届けの証人欄、君に書いてもらっただろうに」

「ああ、確かにな。あの時にはついにおまえの頭がおかしくなったと思ったよ。山のぼってたら女に会ってそのまま結婚することなったとか、いったいどこの日本昔話しだったな」

がははと豪快に笑う。

粗野な態度だが妙に憎めない。さすがは営業畑で、社内でも抜け目なく出世の道を進んでいる男だけはある。私とは大違いだ。

「なあ、夜、久しぶりに一杯どうだ？」

「なんだよ急に」

「いやなあに、部下と飲む約束だったんだが、あいつ今朝になってドタキャンしてき

てな。ちょうどあいてるんだよ」

「面倒見のいいおまえが振られるなんて、珍しいこともあるじゃないか」

「まあ時代だよ。俺たちだってもうオジさんなんだ。大学卒業したての連中なんて宇宙人みたいなもんさ。今日約束してた奴だって長身でイケメンのヤリチン野郎でなあ、社内ではやくも女性社員に手を出してはヤリ捨てるとんでもない奴なんだが、いかせん、そういう奴のほうが仕事はできるんだよな」

「世も末だな」

「まったくだ。今日だってなあ、ヤリチン野郎はセフレが一人壊れて調達する必要があるからって、上司である俺の誘いをドタキャンしたんだぜ？ 信じられるかよ、お

い」

やれやれとため息をつく郷田だった。

それでも心の底から呆れている様子はなかった。なんだかんだで面倒見のいい奴なのだ。だからこそ、こんな人付き合いの少ない私みたいな奴とも交流が続くのだろう。

「それで、どうなんだよ、おい」

郷田が身を乗り出して言った。

酒の誘い。

今日の夜。

とたんに巳雪さんの甘い匂いが強くなつた気がした。

「きよ、今日は……ダメだ」

私はピクンと体を震わせながら言った。

「なんだよ、つれないなあ、おい」

「いや、巳雪さん……家内が、はやく帰っ

てきてほしいって、今朝言ってたんだよ」

郷田が「はあ」とため息をついた。

「あーあ、おまえも嫁さんの尻に敷かれちまったってことか」

「ち、違うよ。そんなんじゃ」

「まあいいや。また今度飲もうぜ」

じゃあな。

そう言つて郷田は去っていった。

私はなおも強くだだよってくる巴雪さんの匂いにビクンと体を震わせ、彼女につくつてもらった昼食をひたすら食べていった。

*

定時になる。

すぐに帰宅した。

何かに追われるように家路を走る。ハア

ハアと息が荒くなっている。下半身が熱くなって仕方なかった。頭の中には巴雪さんだけが浮かんで消えてくれない。

『はやく帰ってきてくださいね』

巴雪さんの声が脳裏でよみがえる。

『はやく続きをしましょう』

体が彼女を求めてしまう。

欲求不満で手がふるえる。

はやく帰りたい。電車のノロさに苛立つ。ようやくアパートのドアに到着した時には、汗だくになってしまっていた。

「はあはあ」

息を整える。

曲がっていたネクタイをなおす。

鍵をあけて「ただいま」と声をかけなが

ら家に入った。

「おかえりなさいませ、旦那様」

巳雪さん。

仕事中もずっと脳裏から離れなかった、私の妻だ。

私の体につけられた匂いとは比べものにならないほどの甘い匂いで頭を殴られる。玄関の床に膝まづき、三つ指をついて頭を下げている長身の女性。かがみこんだせいで、その大きすぎるおっぱいの谷間が露骨に性的なアピールをしている。彼女を前にしただけで、私は盛大に勃起してしまった。

「ふふっ」

巳雪さんが優しげに笑う。

その視線が一瞬、私の股間を情熱的に見つめ、すぐに彼女が立ち上がった。

「う、ああ」

立ち上がった彼女の迫力はすさまじかった。

大きな体。

彼女の肌は赤ん坊よりもきめ細かく、もちもちの極上の肉感であることが見えているだけで分かった。衣服からこぼれている大きなおっぱいで圧倒される。腰がありえないほど細くてくびれており、巨大なお尻とムチムチの長い足によってトドメをさされる。

極上の女体。

私の精を受けて魔性の体がさらに成長している。もやっとしたピンク色の水蒸気みたいなのが彼女の体から立ちあがっていて、巳雪さんが欲情しているのが分かった。

「はやく帰ってきてくれて嬉しいです、旦那様」

彼女が近づいてくる。

憂いを帯びた表情が若干和らいでいる。かわりに今の彼女にあるのはハートマークになって潤みっぱなしの瞳だ。その視線が私のことを見下ろしたまま放してくれなかった。

「う」

声も出せない。

巴雪さんがぐいっと私の体に密着してくる。彼女はそのまま私の背後へと手を伸ばし、内鍵をガチャンと閉めた。その音がどこまでも象徴的に響いた気がした。閉じこめられてしまった。もう逃げられない。これから私は、目の前の女性に犯されるんだ。

「お待ちしておりました」

彼女の腕が私の体に絡みつく。

大きなおっぱいが私の胴体を潰す。

その天国みたいな柔らかさではやくも腰が抜けてしまう。ハアハアと息を荒くするしかない。その間にも、彼女の太ももがぐいっと私の股間に入ってきた。私の背中には玄関のドア。そこに押しつけられ、圧迫されながら、彼女のねっとりした声で溶かされる。

「寂しかったです、すごく」

さわさわと巴雪さんが私の体を撫でる。

「ずっと旦那様のことを考えていました。一瞬たりとも旦那様のことを考えていない時間はありませんでした」

片手で頭を撫でられ、もう片方の手で背

中を撫でられる。その感触だけで「ふわあ」と甘い声が漏れてしまった。

「時間がたつのが遅くて、はやく旦那様が帰ってこないかなと、そんなことばかり考えていました」

彼女の太ももが私の股間をぐいぐいと圧迫してくる。そのムチムチの太ももによって私の体の下から持ち上げられ、足が地面につかなくなってしまう。

「だから、旦那様がはやく帰ってきてくれて、わたし、本当にうれしいんです」

彼女の顔が迫ってくる。

同じ視線の高さになった巴雪さんから見つめられる。

「つづき、しましうね」

ねっとりとした声。

それだけで体がビクンとふるえた。

「朝、約束しましたよね。続きは本気のベロチューです」

「あ、あひ」

「朝にやっってしまうと旦那様が会社に行けなくなってしまう本気のベロチュー……ふふっ、ぜったい旦那様のことを満足させてみせます」

いきますね？

彼女が口をあけ、見せつけてくる。

舌。

彼女の長くて、肉厚な舌が目の前に迫ってくる。その迫力にごくりと生唾をのむ。これから自分はこの舌で犯されるんだ。そう思い知らされ、体が逃げようとするのだが、全身をみっちり抱きしめられている

ので身動き一つとれない。

「んふっ」

ゆっくりと近づいてくる。

彼女の長い舌が、まるで蛇が獲物を前にして舌をクネクネさせるみたいに動く。そんな光景に見入っていると、勢いよく唇が奪われた。

「じゅるうッ！ ジュバアアアッ！ じゅるううッ！」

暴れている。

さきほど見せつけられたあの舌が、私の口の中で蠢き、私のことを快樂地獄に叩きおとしていく。

（た、食べられちゃってるうううう）

捕食されている。

私の中の大事なものが巳雪さんに食べら

れているのが分かる。巳雪さんが私の口から涎を奪い取ってゴクンゴクンと飲んでいく。私の唾なんかを飲んでいのに、目の前の巳雪さんはすごく幸せそうな表情を浮かべている。潤みきった瞳で私の痴態を逃さず観察している彼女の姿に心を奪われ、ひたすらに唇を奪われていく。

「いかがでしたか、旦那様」

長い時間が経過して、ようやく巳雪さんが解放してくれた。鼻息すら感じられるほどの至近距離から、彼女にまじまじと見下ろされる。

「わたしの本気、満足していただけましたか？」

不安そうな巳雪さんの表情。

私はなんとか口をひらいた。

「は、はひ……す、すごい……すごかったです」

「本当ですか？」

「ほ、本当に……き、気持ちよすぎて、こ、腰抜けちゃいました」

白雪さんの大きな体に抱きしめられ、宙づりにされながら、こちらを見下ろしてくる彼女にむかって率直な言葉を口にする。

「うれしい」

感極まったように。

白雪さんがポロポロと涙を流しながら言う。

「そんなこと言われたの初めてです」

ぎゅううううと抱きしめられた。

絶対に逃がさない。そう宣言されている
みたいな熱い抱擁。

「旦那様がよろしければ、このまま1時間
だって2時間だって、続けましょう」

「あひんッ！」

「わたしの本気の本ロチューで旦那様の理
性をドロドロに溶かしてさしあげます」

じいじいと、白雪さんの視線が私に突
き刺さる。

その視線に耐えられない。私はまるで生
娘みたいに、ぎゅっと目をつむって、唇を
突き出した。

「だ、旦那様」

白雪さんの吐息がハアハアと荒くなった。
熱い抱擁の力も増してすぐに唇を奪われ
る。

「んっむうううッ！」

ぶちゅううううッ！

暴力的に口内がレイプされる。

悶え苦しむ。

口の中が犯されていくのが分かる。

朝とは比べものにならないほどの激しさ。

歯茎や喉の奥までまんべんなく舐められ、
愛撫され、荒々しくレイプされていく。

(息が……………)

激しすぎて息ができない。

苦しい。

苦しいのにきもちい。

その二重舌で新しい快感が体に刻まれていく。白雪さんの舌が荒々しく動く。私の股間に差し込まれた彼女の太ももがグリグリと肉棒を刺激していく。彼女の魔性の手が、私の体という体のすべてを撫でまわし、性感を高めていった。

(だ、だめ……これ、無理)

限界が近づく。

体がビクンビクンと痙攣する。

白目をむいて黒目がグリングリンと動きまわる。

酸欠で頭がぼおつとして、

なにも、

考えることも、

できないまま、

キスだけで、

射、

「ダメですよ旦那様」

「あひん」

あと一瞬でもキスされていたら射精した。その絶妙のタイミングで白雪さんが唇を放した。

射精のタイミングを完全に把握されてしまっている。私の体のことは巳雪さんのほうがよく分かっているのだ。支配されていると感じて私はビクンとふるえた。

「お射精する時は、わたしの体にお願います」

「あ、あひい……ひいん……」

「旦那様には常に極上の射精体験をしていただきたいんです。身も心も溶けてなくなってしまうほどの快感で、旦那様のことを骨抜きにしてさしあげます」

巳雪さんが私の体を撫でながら囁く。

もうすでに骨抜きにされている。私は巳雪さんの大きな体に抱きしめられ、その豊かな女体に埋もれながらアヒアヒ悶えるだけの猿になってしまっていた。

「ふふ、服脱がしちゃいますね」

巳雪さんが笑って、私の衣服を剥ぎとり始める。

明らかに慣れていている。

男の衣服を脱がすことに熟練しているのが分かる動き。抱きしめられ、宙づりにされながら、あつという間に上着を脱がされ、ズボンのベルトもはずされて、全裸に剥かれてしまった。

「旦那様、立てますか？」

「ひい……あひい……こ、腰抜けて」

「立てませんか？」

「ご、ごめんなさい」

ガクガク体がふるえて力が入らない。

全身が脱力してしまって巳雪さんの体に身を任せるだけの情けない状況。それなの

に、巳雪さんは優しく笑ってくれた。

「大丈夫ですよ。わたしに任せてください」

「み、巳雪さん」

「わたしが支えてあげますからね。旦那様は快感に身をゆだねてください」

すべてを許してくれるような慈愛に満ちた表情で心が暖かくなる。ガクガクふるえる体で情けなくコクンとうなずく。巳雪さんが聖母みたいな笑顔で答えてくれて、次の瞬間に悪魔になった。

「ひいひいひいッ」

蛇が獲物に襲いかかるみたいに。

巳雪さんがかかんで膝立ちになったかと思つと、そのままがっちりと私の腰をかかえて強引に支えてきた。巳雪さんに抱きしめられた私はプルプルふるえるだけになる。

怯えながら下を向くと、そこには私の肉棒

を目の前にして発情している大蛇がいた。

「おいしそう」

「ひいひいッ！ ひいひいひいッ！」

「いただきますね？」

巳雪さんが大きく口をあけた。獲物を丸飲みする白い大蛇。獲物である私はそのまま丸飲みにされた。

「ジュッポオオオオッ！」

「あああああああッ！」

根本まで勢いよく食べられてしまった。

ぐじょぐじょと涎たっぷりな口内で肉棒が愛撫される。舌が蠢きまわって私の弱点を重点的に責めなぶってくる。目の前がチカチカして、快感のあまりぎり落ちてしまひそうになるのだが、巳雪さんに下半身を

熱烈に抱きしめられているせいでそれも許されなかった。

「あひいんンッ！」

私は立っていて、巳雪さんは膝まづいて
いる。

本来ならば私のほうが立場が上で麗しき女性に性のご奉仕を強要しているような格好。けれども逆だった。立っている私が、膝まづいている女性に食べられている。責められ、犯されている。それを嫌でも分からされた。

「ぐぼおっ……じゅるうぐっぼ……」

「あひん……ひいん……」

巳雪さんの凶悪なお口が躍動する。

頬をすぼめて、私の肉棒を頬肉と頬肉でサンドイッチにしながらピストンを開始す

る。根本まで丸飲みされて、私の肉棒のすべ
てが巳雪さんの口と喉の中に吸い込まれる。
根本どころか私の下半身ごと丸飲みするよ
うな勢い——次の瞬間にはズルズルと巳
雪さんの顔が持ち上がっていき、亀頭だけ
を頬張ってグリグリされる。彼女のぷっく
りとした肉厚な唇によって亀頭全体が愛撫
されて悶絶してしまう。それが終わるとま
たしても根本までピストンされて——そ
れが繰り返される。

「ひいん……あひん……」

卓越したフェラチオ。

喉奥深くまで肉棒を飲み込んで行われる
献身的なご奉仕。本来ならば雄としての優
越感で興奮する場面だろう。しかし巳雪さ
んの底なし沼みたいな喉奥に引きずり込ま

れる恐怖と、強すぎる快感によって、捕食されて食べられているという感覚しかなかった。

「ジュボオオツ……じゆるっじゅっぼ……」

ピストンがゆっくりと続けられる。

勢いよく乱暴な感じではない。

一瞬で射精させないように注意していることが分かる優しいフェラチオ。私が簡単に射精しないように手加減しているのだ。そのことが脳髓に響くような快感をもたらした。

「んふっ」

巳雪さんが笑いながら私のことを見上げてくる。

喉奥まで私の肉棒をくわえこんでいるのに苦しそうな様子をまったく見せないまま、

余裕の笑顔でフェラチオを続けている。私
が「あひあひ」悶えている姿を上目づかい
で見上げ、堪能しながら、底なし沼みたい
なフェラチオを繰り返してくる。

（おがじぐなるううッ！ おがじくなっちゃ
うううッ！）

手加減をされているので射精できない。

それなのに肉棒には限界ぎりぎりの快感
がずっと続いている。体がなんとかこの快
楽地獄から逃げようと暴れるのだが、巳雪
さんの両腕が私の腰を力強く抱きしめてい
るせいで逃げることも許されない。生きた
まま丸飲みされて食べられていく。少しづ
つ体が捕食され、消化されていくのだ。私
は発狂しそうになった。

「い、イがぜでえええッ」

膝まづいた女性に懇願する。

「み、巳雪しゃん、も、もう無理だからああ」

「……………」

「しゃ、射精させてくださいしゃいいいッ！」

お願いしますうう……射精させてえええ」

必死にお願いする。

それなのに巳雪さんはニッコリと笑顔を見上げて、

「ガッポオオッ……じゆるごっばおお……」

「あひいいいんんッ！」

生殺しフェラチオを続けてしまった。

ニッコリと慈愛に満ちた笑顔で私のことを見上げながら、男殺しの丸飲みフェラチオで、射精を許さず、獲物に致死性の快樂毒を送り込んでくる。

「イがじえでくだじゃいいいいいいッ！」

ぼろぼろと涙が出てくる。

それが巳雪さんの顔にぼたぼたと垂れる。

巳雪さんがイタズラに成功した幼児のように純真無垢に笑った。

「んふっ♪」

その瞳が「いじわるをして申し訳ありません」と語っている。

次の瞬間、慈愛に満ちた笑顔が、悪魔娼婦のように輝いた。

「ジュボオッ！ ジュブウッ！」

暴力的なピストンが始まる。

これまでの生殺しのフェラチオではない。勢いよく頬肉と頬肉で肉棒をミンチにして乱暴に続けられるフェラチオ。私の腰を殴打するみたいに巳雪さんの美しい顔が私

の腰を叩きつけていく。

「ひゃあああああッ！」

ひとたまりもなかった。

これに耐えられる男なんているわけがない。

白雪さんの顔が視認できないほどの速さでピストンを続けていく。射精させてほしいなんて懇願しないほうがよかった。その後悔するほど熱烈な責め。ガクガクとふるえ、すぐに限界をむかえた。

「イぎまじゅうううッ！」

どっぴゅうううううッ！

びゅっびゅううううッ！

射精する。

命を吐き出すみたいな熱烈な射精。

白雪さんが最後の瞬間にこれまで以上に

喉奥まで肉棒をくわえこむ。彼女の喉奥で命を搾り取られてしまう。ガクガクとふるえながら射精するだけ。なにも考えられない極上の射精体験。こんなのを知ってしまったらもう逃げられない。自分よりも上位の存在に丸飲みされているという被虐の快感とあいまって、いつまでも射精が終わらなかった。

「んんふっ……じゆるじゆるうッ！」

ようやく射精が弱まると最後の仕上げが始まる。

ゆっくりと、真綿で首を絞めるように。

白雪さんが私の肉棒を丸飲みしたまま、じっくりとしゃぶっていく。じゅぶじゅぶと、ナメクジが這うみたいな緩慢さで、私の肉棒を頬肉でしこり、尿道に残った精液

を一滴残らず搾り取っていく。にっこりと笑った彼女が、最後に唇で亀頭だけをくわえこみ、チュウルルツと吸い始める。その間も尿道には彼女の魔性の舌が這いまわっており、刺激を加えるのを止めてくれない。尿道の中の精液一滴たりとも逃がさない。そんな執拗さで、巳雪さんが亀頭だけをバキュームして、ようやく「ジュボンツ」という音をたてて肉棒を解放してくれた。「んふっ」

巳雪さんが妖艶に笑った。

彼女が口の中に溜まった私の精液をころころと舌で転がし始める。いつものように堪能しているのだ。搾り取った私の精液を味わって恍惚とした表情を浮かべている巳雪さんの姿は、どこまでも妖艶だった。

「ふふっ」

巳雪さんが大きく口をひらいてきた。

口の中で大量に溜まった精液が目飛び込んでくる。ピンク色の菌茎や長い舌に絡まった子種を見て「ああ、搾り取られてしまったんだ」とガクガクふるえた。

「ゴクンツッ！」

巳雪さんが私の子種を飲み込んだ。

いつものように一飲みですべて丸飲みされてしまった。私はアヒアヒ悶えることしかできない。

「ふふっ、ごちそうさまでした」

巳雪さんが私を見下ろしながら言う。

「旦那様の精液、とてもおいしかったです」

「あひ、あひい」

「すごい力がわいてくるんです。旦那様の

子種をいただく、力が増していくのが分かります」

片手でお腹をさすりながらの言葉。

そのお腹の中で今も消化されている私のDNA情報たち。吸収されてしまった私の大事な子種たちが、彼女の胃の中で栄養にされて、巳雪さんの活力に変換されているのが分かる。

「それでは、夕ご飯の準備をしてきますね」
にっこりと巳雪さんが笑った。

「それまでお休みください」

巳雪さんが立ち去る。

私は完全に腰が抜けて、玄関の床の上でアヒアヒと喘ぎながら悶え続けた。



毎日搾り取られる。

精液が空っぽになるまで射精を繰り返し、巳雪さんの体に溺れるだけの毎日。夜は気絶するように眠りにつき、出勤前にはマージングとディープキスを施される。仕事でも巳雪さんからの責めを妄想しては一人興奮する。そして家に帰ればまた搾り取られる。それがずっと、毎日のように続いた。

「ごちそうさまでした、旦那様」
夜。

何度目になるか分からない射精のあとで巳雪さんが言った。

片手でお腹をさすりながら、巳雪さんが幸せそうにほほえんでいる。いつものように私の放出した大量の子種を丸飲みし、胃

の中におさめ、今まさに消化しているのだ。

「それではマッサージをしていきますね」

しかも最近はおっぱいになってても許しても
らえなかった。

首を左右に振って訴えかける私を無視し
て、白雪さんが私にのしかかってくる。ずっ
しりと重い極上肉布団の下敷きにされて、
私の体が身動き一つとれなくなる。彼女の
生乳が私の横隔膜あたりで潰れて、その感
触だけで体がふるえる。目の前にはねっ
りとした瞳。彼女がそのまま、最近の恒例
行事となった乳首責めを始めてしまった。
「アアンツ！」

彼女の手が私の乳首をこねくりまわす。

完全密着のまま私の胸板に10本の魔性
の指が這いまわっていく。

乳首をカリカリと人差し指だけで蹂躪さ
れる。かと思えば乳輪に沿って永遠と円運
動が繰り返され、焦れたところでぷっくり
膨れた突起が襲われる。その技巧はあまり
にも卓越していて、一瞬たりとも喘ぎ声を
我慢することができない。

「お声、とってもかわいいです」

白雪さんが私の顔を見下ろしながら、

「もっと喘いでいいんですからね」

「あひん……ひいん……」

「わたしの前では我慢しないでください。ど
んなに情けない姿になっても幻滅なんてし
ませんから」

カリカリカリッ！

すべてを受容する聖母のような笑顔で見
下ろされながら、熟練した娼婦のような手

つきで乳首を責められる。我慢なんてできるわけもなく、私の口から「あ、あ、あ」と甘い声が漏れる。それを聞き、まるですばらしい音楽を堪能するかのように巳雪さんが恍惚とした表情を浮かべた。

「乳首、かなり敏感になってきましたね」

「ひいん……あ、だめえええ」

「人差し指だけでカリカリしてあげます」

カリカリカリッ！

単調な上下運動が乳首の突起を何往復もして蹂躪してくる。私の体はその2本の指の動きにあわせて痙攣し、「あ、あ、あ」と声をあげるだけの機械に変わった。

「きもちいですか、旦那様」

巳雪さんが問いかけてくる。

答えを聞かなくても分かっているはずだ。

こんなにも喘ぎ声を漏らし、メスになっている男を見れば、答えなんて分かっているはず。それなのに巳雪さんは私の口から答えを聞きたがる。私は頭を真っ白にしなから言うしかなかった。

「ぎ、ぎもじいじいッ！」

「どうされるのがきもちいですか？」

「ち、乳首こねこねされるのがぎもじいッ！ み、巳雪さんの手で乳首めちゃうく

ちやにされると、頭おかしくなりますうう」

絶叫する。

それを聞いて巳雪さんがうっとりとして恍惚とした表情を浮かべ、さらに過激に乳首をいじめてくる。威圧感のある美貌によって見下ろされて、被虐の快感でビクンとふるえながら甘い声を漏らす。それがずっと続

いた。

「ふふっ、トロトロになりましたね」

どれくらい時間が経ったのだろう。

床に倒れて悶絶する私のことを見下ろし

ながら、巳雪さんが嬉しそうに笑っている。

「焦点があわない瞳で体中脱力させて、び

くんびくんふるえている姿、とっても素敵

です。もっともっと、旦那様のことをおわ

いがってあげたくありません」

だから、と。

献身的に狂信的な愛情をそそいでくる巳

雪さんが、にっこりと笑って、

「次はお尻をおかわいがってあげますね」

その言葉で弛緩していた体が恐怖でふる

えた。

ダメだ。それだけは絶対にダメだった。

「ら、らめえええ……み、巳雪さん、それ、だめええええ」

「大丈夫ですよ。わたしに任せてください」

「らめだからあああ……巳雪さんに任せたら、おかしくなっちゃうからあああ」

泣き叫ぶ。

これまでされてきたアナル責めの記憶が

よみがえり、はやくも快感で頭がおかしく

なりそうだった。

「ダメですか？ 旦那様」

哀しそうにしながら巳雪さんが問いかけ

てくる。

「旦那様が嫌がっていることをわたしはし

たくありません。本当にダメならお尻は止

めにしないとけません」

うるうるとその瞳に涙がたまっていく。

そんな超絶美貌で哀しそうな表情を浮かべないでほしい。こんな顔して哀願されたらどんな雄だって断れないだろう。

「必ずきもちよくしますから」

巳雪さんが誘惑してくる。

その手が私のお尻をなでなでと撫で回していく。変態中年男性が豊富なJKのお尻を執拗に撫で回すみたいにな、巳雪さんが私のお尻を撫でていく。

「ぜったいに後悔させません。旦那様の体の中を丁寧に丁寧に責めて、前立腺のまわりを重点的にマッサージュしてさしあげます。ほら、この舌ですよ」

べろんと。

私の目の前で長い舌を伸ばし、見せつけてくる。

「この舌を旦那様のアナルに挿入して、トロントロンにしてさしあげます」

「あ、ああああ」

「理性なんてひとかけらも残させません。旦那様には獣みたいなきな悲鳴をあげてもらいます。そんなすごい快感を旦那様には堪能してほしいです」

ダメですか？

哀しそうな表情で再度問いかけてくる。

お尻の撫で回しは継続。

私は本能を優先してしまった。

「犯してくださいいいッ！」

涙を流しながら哀願する。

「巳雪さんの舌でめちゃくちゃにしてええええええ」

喉がかけられるほどの絶叫。

巳雪さんがにっこりと笑った。

「よくできました」

巳雪さんが私の背後にまわる。

強引にはなく、自然な流れで私の体が四つん這いにさせられる。腰ががちりとつかまれ、完全に拘束されたことが分かる。ねっとりとして長くて肉厚な舌が尻穴に進入してきた。

「いっきいいいッ！」

その感触だけでダメになる。

巳雪さんの舌が力強いドリルみたいに私の体内に進入してくる。奥深くまで挿入され、無防備な尻穴がめちやくちやにされる。彼女の長い舌が私の弱点を重点的に責めまくっていく。

「いっきいいいッ！」

断末魔の悲鳴が口から漏れる。

強制的に泣き叫ばされる。

絶叫していなければ明らかに気が狂う。それほどまでのアナル責め。私の体の中で、強くて長い異物が這いまわっていく。

「んふっ」

そんな私の絶叫が気に入ったのか、巳雪さんがさらに私のことを追いつめようと舌を伸ばしてきた。前立腺。その周囲だけをぐねぐねと舌先で刺激された。

「ひいいいいいッ！」

ビクンンッ！

ビクビクンンッ！

目の前に電流が走る。

四つん這いの体勢を保つこともできずに、床に顔面を突っ伏して悶え苦しむ。その間

も巴雪さんは前立腺の周囲を舐めあげることに余念がない。彼女が、じつくりと、執拗に、前立腺の周囲だけを舐めていく。

「ちぬうううッ！ 死んじやうううッ！」
痙攣が終わらない。

射精もできない生殺し状態。

巴雪さんが前立腺を舌先で刺激してくればメスイキとトコロテンで昇天できる。けれど彼女は絶対に前立腺への刺激を与えてくれなかった。その輪郭にあわせて舌先を蠢かせるだけ。その舌の動きによって前立腺の形を教えられてしまう。

「ゆるじでえええええッ！」

「じゅばああッ！ じゆるうううッ！」

「ひゃだあああッ！ 巴雪さんんんッ！」

「ジュルウウッ！ じゅばあああッ！」

「ひゃああああんんッ！」

やめてくれない。

彼女の長い舌が私の尻穴内で永遠と蠢いていく。さきほどから何度もメスイキしているのが分かる。それでも手加減されているから生殺しが続く。ずっとずっと、巴雪さんがマッサージと称した快樂拷問を続けていく。

「んふっ。すごい、旦那様の……回復しました」

巴雪さんが私の尻穴から舌を引き抜いてから言った。

四つん這いになった私の背後から、彼女の手が伸ばされ、その長い指が私の肉棒に絡みついてきた。

「たくましい……旦那様のすごくたくまし

いです」

「あ、あ、あ、だ、ダメ。撫で回さないでええ」

「ふつうだったら、あれだけ射精すれば回復なんてできないんです。それなのに旦那様はすごいです。さきほど空っぽになるまで搾り取ったのに、もう回復しています」

卓越した手コキ。

ねちっこく、男の弱点という弱点を知り尽くした手つきで、巳雪さんが私の肉棒を愛撫していく。四つん這いになった私の体に覆いかぶさるようにして、両手でしこしこ肉棒を手込めにしていく。彼女の大きなおっぱいが私の背中でごんにやりと潰れている。上から押し潰されながら、くちやくちやくと肉棒をいじられていく。まるで子

分である猿にマウンティングをするボス猿のような格好で、巳雪さんが私の肉棒をもて遊ぶのをやめてくれなかった。

「私のために子種をつくってくれたんですね」

ねっとりとした声で巳雪さんが言う。

「旦那様のおいしい精液なら、いくらでも食べれます」

我を忘れていることが分かる声色。

欲情した巳雪さんを止めることなどできない。

「いただきます、旦那様」

じゅぽおおおッ！

「ひいひいひいひいッ！」

再び、私の尻穴に巳雪さんの凶悪ペロが挿入された。

ぐねぐねと舌が蠢く。前立腺マッサージ。生殺しのような責め。

それと同時に巳雪さんの両手が私の竿と玉袋を虐殺してきた。右手が過激な上下運動で竿をしこっていく。単純な動きに見えて緩急と繊細なタッチがすごい。私の弱点を知り尽くしている巳雪さんが、私のきもちが良いところばかりを狙って愛撫してくる。さらに左手は玉袋をこねこねと揉んでいた。その中身をはやくぶちまけると、執拗に、ねっとりとした手つきが続いていく。「ひゃあああああッ！ あああああッ！」

我慢できる男なんていない。

私はあつという間に体を痙攣させ、己の命を精液に変えて、射精を、

「んふっ」

ぐりぐりいいいいッ！

「ぎゃああつああああッ！」

どっびゅうううううッ！

びゅっびゅううううッ！

射精する。

最後のタイミングで、前立腺が舌先でぐいっと潰された。それはまるで私の急所を舌で串刺しにするみたいな動きだった。腰が跳ね上がり、終わらない射精で体をビクンビクンと痙攣させる。

「ふふっ、すごい勢いです」

巳雪さんが熱に浮かされたように言う。

「ぜんぶ搾り取ってあげますからね」

ぎゅううううッ！

しこっ、しこっ。

舌を離して手コキだけに集中し始める。

射精中の肉棒に容赦のない追い打ちをかけていく。射精の脈動にあわせて右手が上下運動をしていく。もっと出せと。一滴残らず搾り取ってやると決意していることが分かる執拗な手コキ。彼女の左手は、ずっと私の射精を受け止めて、その手のひらに精液を溜め続けていた。

「あひいん……ひいん……」

悶え苦しむしかない。

射精の勢いが弱まる。

それでも巳雪さんは手コキをやめてくれない。
ない。

ゆっくりと、執拗に、肉棒をしこつていく。しつこい。ハイエナだつてここまで貪欲ではないだろう。彼女の握力も強くなり、ゴムチューブの中身を根こそぎ搾り取るみ

たいにして、尿道に残った精液もすべて搾り取られてしまった。

「すごい……子種がたくさん……」

何度もシコシコされた後、ようやく巳雪さんが私の肉棒を解放してくれた。

精も根も尽き果てて、私の体が床に突っ伏してうつ伏せで倒れる。ハアハアと息が荒く、射精とメスイキの余韻で体がピクピクと痙攣しっぱなしだ。

「旦那様、見てください」

巳雪さんがうれしそうに笑っている。

体に力が入らなかつたので、顔だけ巳雪さんのほうに向けると、彼女がこちらにむかつて両手に溜まった精液を見せつけてきていた。

「こんなに搾り取りました」

「あひ……ひいん……」

「いただきますね」

じゅばおおおおッ！

盛大に。

美しい女性が私の精液をすすっていく。

もはや我慢できないらしく、すすること
に飲み込んでいく。ゴキュゴキュと彼女の
喉が鳴っているのが分かる。精液をすす
る姿はあまりにも妖艶だった。私の子種が捕
食されている。

「あ、ああああ」

恐怖と快感でダメになる。

巴雪さんはあつという間にすすり飲んで
しまった。あれだけ溜まっていた精液が彼
女のお椀の形にした両手の中に一滴たりと
も残っていない。

「んふ……ジュルウウッ！ じゅばあッ！」

終わらない。

巴雪さんが両手に付着した精液を舐めと
り始めた。あの長くて肉厚な舌が蠢いて、
自分の両手を舐めていく。最後の一滴まで
ぜんぶ舐めとる執拗な様子に、私の肉棒が
ビクンと反応してしまった。

(な、なんで)

勃起してしまった。

限界まで射精したのにまた勃起してしま
ったのだ。

さあああつと、背筋が凍った。

(だ、ダメだ。こんなの巴雪さんに見られ
たら)

また搾り取られてしまう。

時間をかけてマッサージをされて、強制

的に子種をつくらされて、また巴雪さんに搾り取られてしまうのだ。そんなことになれば死んでしまう。私は焦って肉棒を隠そうとする。しかし、そんな私の考えなんてお見通しだと言わんばかりに、巴雪さんの瞳がキラリと光った。

「んふっ」

巴雪さんの妖艶な瞳が私の勃起した肉棒を見下ろした。

その口元がニンマリと笑った気がした。捕食者と獲物——巴雪さんが襲い私が食べられる。そういう関係だ。

(に、逃げないと)

このままだと食べられてしまう。食欲旺盛な肉食動物にまた捕食されてしまう。

「あっひ……ひい……」

脱力した体にムチを打って、弱々しいほふく前進を始める。

ナメクジみたいに床を這って必死に逃げ。体が脱力しきっていてその動きは遅々として進まない。まるで体中の骨を抜き取られたみたいだ。

「逃げちゃダメです」

「あああああッ！」

うつ伏せでなんとか這おうとする私の体が、巴雪さんの大きな体によって潰されてしまった。

彼女のおっぱいがぐんにやりと私の背中を押し潰す。極上の女体で生き埋めになる。こうなったらもうダメだ。私は一步も動けなくなり、床に縫いつけにされてしまった。

巳雪さんの柔らかい豊満な体に吸い込まれて消化されるみたいに、ただただ心地よい圧迫感に身を委ねてしまう。

「旦那様、またマッサージしましょう」

「あ、だ、だめえええ」

「旦那様ならまた回復できます。そうしたら、旦那様のこと、もっともっと気持ちよくできます」

彼女の両手が私の体の前にまわされる。

巳雪さんの指が私の小さな乳首に絡みつき、蹂躪を始める。

「アッ！ アッ！ アアッ！」

声漏れる。

体が痙攣しようとするのだが、巳雪さんの体によって全身が押し潰されているせいでそれすらもかなわない。彼女の指だけが

モゾモゾと動き、私の乳首を虐めまくっていく。

「すぐく、いい声ですね。旦那様」

私の耳元で、脳味噌が溶けるような声色で囁かれる。

「ずっと聞いていたい。旦那様の喘ぎ声、とってもかわいくて、癖になってしまいたいそうです」

「アアッ！ アッ！ アッ！」

「もっともっと、いい声で鳴かせてあげます。だからマッサージしましょ？ 回復したら、また搾り取ってあげますから。旦那様の精液は一滴たりとも逃がしません。ぜんぶ搾り取ってあげます。これ以上ないくらい射精体験で、旦那様のことかわいがってあげますから、ね？ マッサージさせて

ください」

片手が乳首をカリカリといじる。

もう片方の手がわたしの尻穴を優しくノックし始める。

甘い誘惑。あくまでも選択権は私にあると見せかけて、決まりきった回答を迫ってくる。我慢なんてできるはずがなかった。

「マッサージしてくださいいいいッ！」

言った。

言わされた。

背後で巳雪さんが幸せそうな吐息をもらした。

「愛しています、旦那様」

男殺しのマッサージが始まる。

すぐに私は言葉を忘れて喘ぎ声を漏らすだけの猿に変わった。

捕食者である巳雪さんが、せっせと神経毒を獲物に送り込むみたいに、私に快感を与え続けていった。



夜の巳雪さんは激しい。

私の精液を搾り取るために積極的になり、子種を求め続ける。

巳雪さんの体は男を殺すために際限を知らず進化していくようだった。私の精液を捕食するたびに、彼女の体がより男の精液を搾りやすく進化していくのが分かる。甘い匂いが増し、妖艶なフェロモンを周囲にふりまいて、獲物である私を誘う。そんな肉体的な性能だけでも勝てないのに、彼女

の卓越した性技が加わったらもうダメだ。私はただただ彼女に精液を捧げるだけの家畜になるしかない。

(エサだ……サキュバスのエサにされちゃつてる)

朝昼晩と精力のつく栄養満点の食事(亜鉛たっぷり)を提供され、精液を作らされて、そして夜に収穫される。サキュバスのエサ。巳雪さんの家畜となり、彼女に精液だけを捧げるだけの毎日。もしも巳雪さんに狂信的な愛情がなければ、私の精神も人格も、とつくの昔に破壊されてしまっていただろう。

「旦那様はゆっくり休んでいてください」
帰宅すると食事の準備をしてくれる。

私はいっさい手伝うことを許されていな

い。

一家の大黒柱に家事までさせられないと、まるで昭和の時代に戻ったみたいな考えをかたくなに口にして、巳雪さんがすべてを準備してくれる。家の中は常にピカピカに綺麗だ。彼女がせっせと雑巾をかけ、汚れ一つない清潔な環境を整えてくれる。汚いトイレや排水溝についても巳雪さんは手を緩めず、熱心に掃除をしてくれるのだ。彼女の美しい指を汚したくないなんていう気色の悪い独占欲が胸に浮かび、それ以上に彼女のことを大事にしようという暖かい幸福感が胸を包む。

「おまたせしました、旦那様」

食卓に今日も豪華な食事が並ぶ。

すべてが精力のつくものばかりだ。精子

を構成するたんぱく質や亜鉛といったものを摂取できる食事たち。毎日搾り取られているので体が目の前の栄養素を欲していることが分かる。

「いただきます」

手をあわせて箸を手にとる。

焼き魚をほぐしてから口に運ぶ。

(うまい)

焼き加減なんか絶妙すぎる。

あぶらが落ちないギリギリの火加減であぶられた焼き魚に舌鼓をうつ。野菜がたくさん入った味噌汁をすすって、「ふう」と息が出た。

「どうですか、旦那様」

そんな私のことを巳雪さんが心配そうに見つめてくる。うるうるとした瞳で不安そ

うに問いかけてくるのは食事の時の恒例になっていた。

「お口にありましたか？」

不安なのだ。

こんなにもおいしい料理なのに、巳雪さんはいつも不安そうに問いかけてくる。私は白米をかきこみながら、言った。

「おいしいです、すごく」

「本当ですか？」

「はい。なんとというか、体に染み渡ってくる気がします。巳雪さんは本当に料理が上手ですよ。丁寧に時間をかけてつくってくれたんだなあって、それがわかります。ええと、その、愛情みたいなものが伝わってきますよ」

柄にもないことを言って赤面する。

それ以上に顔を真っ赤にした巴雪さんが
恥ずかしそうに顔をうつむかせてから、上
目遣いで私のことを見上げてきた。その表
情は明るくなり、喜んでくれているのが分
かる。心が暖かくなるようなニッコリとし
た笑顔。

(めちやくちやかわいい)

顔を赤くしてご飯を食べていく。

口の中にいろいろな味がひろがる。一つ
一つの食材が確かな力をもっているように
感じられる。私は夢中になって巴雪さんの
用意してくれた食事を平らげていった。

(巴雪さん、綺麗だ)

食事を堪能しながらも我慢できずチラチ
ラと巴雪さんのほうを見てしまう。そうす
ると、彼女も私のほうを見つめていて、自

然と目があつた。にっこりと笑つた巴雪さ
んが言う。

「ご飯をたくさん食べてくれてうれしいで
す」

「いや、こんなにおいしいご飯なら誰だっ
て夢中になりますよ」

「いいえ。小食の男性というのはいますか
ら……それに、体が消耗していると、食欲と
いうのも自然と弱くなるものなんですよ？」
消耗？

ただ仕事をしているだけで体が消耗なん
て……というところで唐突に気づく。

(み、巴雪さんは、夜のことを言ってるん
だ)

あれだけ搾り取られて体力が消耗すれば
食欲だって少なくなる。巴雪さんはそのこ

と言っているのだ。それは体験談なのかもしれないなかった。

（今まで、巳雪さんが結婚してきた3人の男性）

そのことが気になって仕方なくなってしまう。

おそらく元夫たちの中には小食な男がいたのだろう。夜の情事のせいで体力が消耗して、食欲がなくなった奴もいたはずだ。そのことを考えると頭がおかしくなりそうだった。最初の頃にはなんともなかったのに、巳雪さんと生活を共にしていると、彼女がほかの男に愛情を向けていたという事実が、自分の中で耐えられなくなっていく。

「旦那様？」

心配そうに巳雪さんが問いかけてくる。

私は「なんでもないです」と笑って、巳雪さんのつくってくれたおいしい食事を食べていった。

＊

食事も終わって、一息つく。

テレビを見ながらゆったりとした時間が流れる。

巳雪さんが洗いの物をすませると、台所でせっせと働き、おつまみをつくってくれた。ビールと一緒に持ってきてくれる。

「旦那様、どうぞ」

「ありがとうございます」

コップを受け取り、巳雪さんにビールをそそいでもらう。

泡のたつ音と琥珀色の液体に心がおどる。喉をならしてビールを飲む。疲れた体に染みわたるようだった。すぐにコップが空になる。

「どうぞ、旦那様」

すると巳雪さんがまたビールをそそいでくれる。

その動作もなんだか高級ホテルのウェイトレスのようで、最上級のおもてなしを受けているみたいだった。嫌な顔一つせず、むしろ嬉しそうに酌をしてくれる巳雪さん。その上品な美しさを前にして、思わずみとれてしまう。

(こんな綺麗な女性が、私の妻なんだな)

現実感がない。

彼女いない歴イコール年齢だった私に、

こんなにも美しい妻ができるなんて想像することもできなかった。

そんなことを思いながらぼっとテレビを見つめる。画面の中では美人女優として名高い女性が食レポをしていた。肩だしのセーターと白色のミニパンツを履いた女性。しかし、そんな美人女優をもってしても、目の前の巳雪さんの美しさにはかなわない。(肩だしセーターか)

思わず、テレビの中の美人女優の服装と、巳雪さんの服装を見比べてしまう。

今の巳雪さんは和風の服装だった。良く言えば落ち着いていて、悪くいえば古くさい。まるで田舎のおばあちゃんが着るような服装。巳雪さんがテレビの美人女優みたいな服装をしたらどうなるだろう。テレビ

と巳雪さんを見比べ、肩だしセーターを着ている巳雪さんを想像して、興奮してしまつた。

「旦那様、どうされました？」

不思議そうに巳雪さんが言う。

私の視線につれられて彼女もテレビを見つめる。そこに映った美人女優を見て、若干、その顔が暗くなった気がした。

「旦那様は、こういうタイプの女性が好きなんですか？」

暗く、ぐっしよりと嫉妬で濡れたような声色。瞳に若干ではあるが涙をためて、巳雪さんが言う。

「やはり、わたしみたいに身長が高くて、年齢も若くない女よりも、テレビの中のこういう女性のほうが旦那様もお好きですよね」

しょぼんとうなだれてしまう巳雪さんだつた。

私は慌てて言った。

「ち、違いますよ。なに言ってるんですか」「でも……」

「私にとって巳雪さんはもったいないくらいに魅力的です。身長が高いのだからむしろ好みです。年齢なんて関係ありません。私は巳雪さんしか好きじゃない」

勢いよくまくしたてる。

私の独白に驚いたように押し黙る巳雪さんにむかって、言い訳するように続けた。

「テレビの女優を見ていたのは、彼女が着ている服を巳雪さんが着たらどんなに魅力的だろうなって想像してただけなんです。すみません、不安にさせてしまつて」

謝り終わって、巳雪さんを見つめる。

彼女は顔を真っ赤にしてウルウルとした腫で私のことを見つめていた。その腫には明らかなハートマークが浮かんでいる。

「あ」

気づいた時には遅かった。

彼女の顔が近づいてきて、いきなり唇を奪われる。

「んっむううう!?!」

舌が入ってくる。

思わず逃げようとした体が、彼女の両腕によってがっちりと捕獲される。大きな胸が私の矮小な胸板におしつけられる。ぐんにやりとした感触だけで腰が抜ける。背中にまわされた両腕がぎゅうううつと力を持ち、私の小さな体が、巳雪さんの大きな体に吸

収されるみたいになった。

「じゅばああッ! じゅるうううッ!」

そのまま激しい口づけ。

彼女の長い舌が私の口内で暴れまわっている。

あまりにも激しすぎて息ができない。酸欠と快感で頭がチカチカする。目の前に砂嵐が現れてきたところで、ようやく巳雪さんが私の唇を解放してくれた。

「……旦那様、お慕いしております」

至近距離。

熱に浮かされた巳雪さんが、ねっとりとした視線で私のことを見下ろしている。その肉厚な唇にはまだ私の涎がついて汚れていた。情事の痕跡。私は全身を脱力させて巳雪さんのことを見上げるしかなかっ

た。

「旦那様、少しはやいのですが……しませんか？」

おずおずと。

巳雪さんが夜の誘いをしてくる。

「旦那様のことを困らせてしまったお詫びがしたいです」

「あひ……ひいん……」

「今夜もたっぷりきもちよくしてあげます。全身の力を抜いて、なんの不満もない極上の射精体験で、旦那様に満足してもらいたいです」

ダメですか？

ふうっと、私の耳元に吐息がふきかけられる。

少しづつ積極的になってきた巳雪さん。

夜は彼女の時間なのだ。巳雪さんに誘惑されて、断れる男なんているわけがなかった。

「お、お願いします」

誘いを受けてしまう。

巳雪さんが誕生日プレゼントをもらった子供みたいに純真無垢に笑う。すぐに私の顔面が彼女のおっぱいに生き埋めにされた。優しく子供をあやすみたいにして、私の後頭部と背中を撫でながら、巳雪さんが言う。「今日も空っぽになるまで搾り取ってあげますからね」

ねっとり。

妖艶に。

「空っぽになってもマッサージをして、すぐに回復させて、また搾り取ります。徹底的に旦那様のことをきもちよくしてさしあ

げます」

私のことをおっぱいに生き埋めにしながら巳雪さんが立ち上がる。

そのまま私の体が運ばれていく。夜の食事のために巣穴にひきずりこまれる獲物の気分。それでも私はどこまでも幸せで、これから始まる情事に期待して、体をビクンと震わせるのだった。



朝が来て、巳雪さんの準備してくれた朝ご飯を食べる。

出勤の時間となり、いつものように玄関でマージングされて、彼女の匂いをたっぷり体にすりつけられてからディープキスで

仕上げをされる。

「行つてらっしゃいませ、旦那様」

巳雪さんに見送られる。

私は電車に乗り遅れないようにするために急いだ。

(昨日の夜も激しかったな)

電車に揺られながら昨日のことを思い出してしまう。

巳雪さんの体力は無尽蔵に底なしで、私のことを何時間だって犯すことができた。私の体力はすぐに尽きてしまい、あとはされるがままのめちゃくちゃにされる。昨日も逃げることもできないほど消耗して、何度も何度も射精させられた。その大量に放出した精液をおいしそうにゴクンと飲み干してしまう巳雪さんの姿を思い出してしま

い、電車の中で勃起してしまふ。

(まづい、巳雪さんのことを想像したら、ダメだ)

そう思っても脳裏に浮かぶのは巳雪さんの姿だけだ。

体にすりつけられた彼女の体臭でビクンとふるえてしまう。周りに乗客がいてもお構いなしだ。それは会社に到着して仕事をしている最中も同じだった。昼休みになるまで、ずっと巳雪さんのフェロモンと匂いで体を震わせては勃起してしまつた。

「おいおい、大丈夫かよ、おい」

郷田が珍しく心配そうに声をかけてくる。

なにがだ、と邪険に扱うと、いよいよ「本当に大丈夫か」と真顔で聞いてきた。

「顔色悪いぞ」

「そうか？」

「ああ、俺の部下の長身イケメンヤリチン野郎が、二徹で乱交パーティーやったとか言いながら入社してきた時くらいには顔色が悪い」

どうしたんだと本気で心配されて、そこでようやく自分の体調に気づく。

確かに、眠くて仕方なかったし、妙に体がダルい。体の底に力が残っていない感じだ。思えば、最近、昼間は常にこんな感じだったかもしれない。

「ははん、アレか。嫁さんとハッスルしすぎたんだろう」

郷田の言葉に凶星をさされて、ドクンと心臓が鳴る。

「寝不足っぽい顔してるもんな。ひょっと

して、毎日か？」

「あ、ああ。そうだよ。悪いか」

「お前がまさかなあ。俺がいくら風俗に誘っても首を一度として縦にふらなかつたお前がねえ……嫁さんがそれだけ魅力的なんだろうな」

まあ体調には気をつけろと言って、郷田が去っていく。

その心配の声だけはありがたくちようだいして、残りの昼休みは眠って体力の回復にあてることにした。眠りはすぐにおとずれてくれたのだが、けつきよく夢の中でも巳雪さんに犯された。もう身も心もぜんぶ、彼女に支配されている。そう思うと、なぜかとてもなく興奮した。

*

定時になって、すぐに帰宅する。

そのために日中、眠たい目をこすりながら必死に仕事をこなしてきたのだ。

「はやく帰らないと」

なぜか夕方になるにつれて体調は回復してくる。

定時になるともう絶好調で、風のように電車に乗り、すぐさま自宅へと急いだ。

「はあはあはあ」

息を荒くして、気がつくとも自宅玄関前。

そこでゴクリと喉をならしてドアをあける。

「おかえりなさいませ、旦那様」

巳雪さんの声を聞いただけで体が歓喜し

ているのが分かる。

日中もずっと脳裏に浮かんでいた彼女の姿が目の前にある。それだけで幸せスイッチがガンガンと押されるのを感じた。頭がぼおっと麻痺する。しかも、今日の巳雪さんは特別だった。

「あ」

膝まづいて頭を深く下げている巳雪さん。彼女の服装が昨日までと違っているのに気づいた。

(か、肩だしセーターだ)

それを着用した巳雪さんは、表現することも不可能なほど魅力的だった。体のラインにぴったりとはりついたセーター。巳雪さんの大きなおっぱいがこんもりと隆起していて巨大な影ができています。そのおっぱ

いの大きさだけで意識がもっていかれそうになった。

「いかがでしょうか、旦那様」

巳雪さんが恥ずかしそうに問いかけてくる。

「昨日、旦那様がテレビで見ていた女性と同じ服装にしてみました。旦那様がわたしに似合いそうと言ってくれたので」

巳雪さんが立ち上がる。

下半身には白色のミニパンツ。彼女のムチムチの太ももが目飛び込んでくる。大きなお尻が自己主張をしていて、見ているだけで射精しそうになった。我慢できず盛大に勃起してしまう。

「ふふっ、気に入ってもらえたみたいですね」

ねっとりとした視線で勃起した下半身を
見つめられる。

今にも舌なめずりをしそうな妖艶な雰囲気。芸能人みたいな肩だしセーターとミニ
パンツのせいで、巳雪さんの捕食者として
のレベルが格段にあがっていた。

「旦那様」

「あひん」

抱きしめられる。

体にびったり張り付くセーターのせいで
巳雪さんのおっぱいの感触がダイレクトに
伝わってくる。彼女の両腕が私の背中にま
わされて、優しくナデナデされる。至近距離
からまじまじと顔を見下ろされて、吐息が
かかる。その殺人的な美貌で見下ろされ、ぐ
んにやりと巳雪さんの体に生き埋めになっ

てしまった。

「ほかにも、たくさん買ってきましたから

ね」

「ひいん……ひい……」

「旦那様が好きそうな服を大量に購入して
きました。毎日、旦那様のために家の中で
着てあげますから、楽しみにしてくださいだ
さい」

愛撫が強くなる。

巳雪さんの体臭が私の理性をドロドロに
溶かしてしまう。目の前のオシャレな巳雪
さんの魅力に完全にやられてしまい、言葉
一つ喋れなくなってしまった。

「ふふっ、旦那様、すごく興奮しています

ね」

「あ、あああ」

「とてもうれしいです。これなら、テレビの中のほかの女に目がうつることもないですよね」

ねっとりとした声色で囁かれる。

嫉妬。どろどろとした情念のこもった声。それが耳元で愛を囁くのだ。甘い匂いで頭もバカにさせられて、されるがままになっ
てしまう。

「一度、抜いておきましょう」

「ひい、ひいひい」

「旦那様が私に発情してくれるのは嬉しいですが、このままではご飯も食べれないですからね。これは旦那様のためなのです」
誰かに言い訳するみたいに巳雪さんが言う。

まるで手品みたいに私の衣服を剥ぎとっ

ていく。ニンマリと巳雪さんが笑った。

「いただきますね？」

膝まづいた巳雪さんが、立ったままの私の腰を抱きしめて拘束する。

そのまま大きな口をあけて、勢いよく私の肉棒を丸飲みしてしまった。

「あひいんんんッ！」

私は立ったままで巳雪さんからのご奉仕を受ける。巳雪さんが私の肉棒を喉奥深くまで引きずりこんで、徹底的にレイプを始めてしまった。

「ガボオオオッ！ グッツボッ！」

顔を上下に激しく動かして行う献身的なご奉仕。

普通だったらえづいて苦しむであろう行為を、巳雪さんはニッコリとした余裕の笑

顔で簡単に行ってしまう。彼女の頬肉で肉棒がめちやくちやにされる。さらにはグネグネと彼女の長い舌が絡みついてきて、はやく射精しろと追いつめてきた。



「巳雪しゃああんッ！ 手加減してえええッ！」

「ガッポオッ！ グッポッポオッ！」

「激しすぎるからあああッ！ お願いいいいッ！」

「グボッゴツキユッ！ ゴツキユウウッ！」

「すぐイっちゃうううッ！」

私が泣き叫んで、巳雪さんの瞳が弓なりになった。

手加減なんてするつもりがないことは明らかだった。普段のねつとりと、時間をかけた愛撫ではない。それは搾り取るために最適化されたフェラチオだった。私の気持ちなんて無視して、ただ射精に追い込むための暴力的なフェラチオ。そんな動きをされて男が我慢できるわけがない。

「いっきゅううううッ！」

どっびゅうううッ！

びゅっびゅうううッ！

30秒もかからなかった。

すぐに私は射精した。

巳雪さんに丸飲みされながら、彼女の喉奥で盛大に子種を放出する。その射精の脈動にあわせて巳雪さんが顔を振る。バキュームしながら、一番効率の良い動きで子種を奪っていく。大量の精液が簡単に奪い取られてしまった。

「うふっ、ごちそうさまでした」

ようやく肉棒を解放してくれた巳雪さんが言う。

食べ物をお口に含んだ時と同じように片手で口元を隠しながらの言葉。ゴクンといと

も簡単に喉をならして子種を飲み込んでしまった美しい女性が、地面に倒れて「アヒアヒ」悶えるだけになった私にむかって優しく言った。

「晩ご飯の準備をしますね」

「あひん……ひいん……」

「旦那様はゆっくりとお休みください」

献身的な優しい聖母に戻った白雪さんが言う。

さきほどまで淫らに私の肉棒を丸飲みしていた時とのギャップと、肩だしセーターの魅力の前に、ますます白雪さんにはまっていく自分を発見する。

(白雪さん、すごい)

腰が抜けたまま、玄関でハアハアと息を荒くする。

そんな私のことを白雪さんがうっとりとした表情で見下ろし堪能していくのだった。

*

いつもの栄養満点の食事を食べて元気が回復する。

その間もずっと白雪さんはニコニコして甲斐甲斐しく私の世話をしてくれた。いつものようにテレビはつけっぱなしになっている。けれど、私の視線は一度としてテレビのほうには向かわず、ぼおっと白雪さんのことを見つめていた。

(かわいすぎる)

熱に浮かされてそればかりを考える。

ご飯の前に着替えをした白雪さんは、今

ではフリフリのついたブラウスを着ていた。童貞殺しの体のラインがびったりと出るタイプのブラウス。下半身には黒の腰高ロングスカートが着用されているせいで、巳雪さんの細い腰が浮き彫りとなり、大きなおっぱいがありますます強調されていた。

「どうしました、旦那様」

巳雪さんが不思議そうに言う。

私の口からただただ正直な言葉がこぼれた。

「巳雪さんの服、とても似合ってますね」

「そうですか？」

「ええ。なんとというか綺麗すぎて私ごとが見ていいものなのかと、気後れしてしまいそうです」

劣等感だ。こんなにもスタイル抜群で美

しい生物を、私なんかが見界に入れることすらおこがましいと思ってしまう。

「見てくれないと、ダメです」

巳雪さんが断固として言う。

「これは旦那様のために買ってきたんです。旦那様だけに見てもらうために購入したんですから、じっくり見ていただかないと困ります」

にっこりとすべてを受容してくれる笑顔でそう言うしてくれる。その言葉に甘えてまじまじと巳雪さんのことを見つめてしまい、その魅力の前で頭をぼおっと麻痺させてしまった。

(高そうな服だよな)

じっくり見つめていると、その衣服の素材の良さが目につくようになる。

出迎えてくれたときの肩だしセーターもブランドものの高そうな服だった。さきほど見せてくれたほかの衣服も同じだ。

(お金はどうしたんだろう)

それが気になってくる。

結婚をした後、私の全財産が入った預金通帳は巳雪さんに渡していて、自由に使うてくさいと伝えている。けれど、安月給で働いてきたのでそこまでの蓄えがあるわけではなかった。ここまでの衣服を準備するだけの蓄えはなかったはずだ。長年經理として働いてきたので、お金のことはきちんとしておきたかった。言いにくいことだったが、私は満を持して、

「あの、巳雪さん」

「は」

「その、服を買うお金は足りましたか？」

「え？」

「すごく高そうな服だったので、私の少ない貯金で買えたのかな、と」

「なんだか言っていて自分で悲しくなってくる。自分の甲斐性なしを自覚して恥ずかしくなった。」

「あ、ええとですね」

「はい」

「……これはわたしの貯金を使いました」

「巳雪さんの？」

「はい。私の……これまでの遺産、ですね」
悪い予感がした。

「あ、あの、遺産って？」

「そ、それは……」

「ひょっとして」

「……はい。死に別れた3人の旦那様が残してくれた遺産、です」

その言葉を聞いて、頭を殴られた気がした。

なぜかは分からない。

いや、分かりたくない。

そんなドス黒い感情が自分にあるなんて信じたくない。けれどもきちんと向き合わなければならぬ。逃げてはダメだと本能が訴えてくる。

（嫉妬してるんだ。巳雪さんの今までの旦那さんに）

死に別れたという3人の男性。

遺産、というからにはかなりの金額だったのだろう。おそらく私とは比べものにならないほどの資産をもっていたはずだ。間

違っても巳雪さんにお金を出させて服を買わせることなんてなかったのだろう。

「巳雪さん」

「は、はい」

「ごめんなさい」

「え？」

「私に甲斐性がなくて……すみません」

謝る。

息をのむ声がして、巳雪さんがさらに泣きそうになった。

「すみません巳雪さん」

「そ、そんな、旦那様が謝る必要なんてありません」

「でも……」

恥ずかしくて顔が熱くなる。

下をむいて、つぶやくように、

「私の給与じゃあ、巳雪さんのことを満足させられていないんですよね。それが本当に申し訳ないんです」

言ってしまった。

こんなこと言うつもりはなかったのに、ついつい巳雪さんを責めるような言葉を吐いてしまった。自己嫌悪で頭に血がのぼってくる。消えてなくなりたいと思っっていると、どこからか「ひ」と悲鳴みたいなものが聞こえた。顔をあげると、そこには顔を蒼白させて絶望の表情を浮かべている巳雪さんがいた。

「そ、そんなことありませんッ!」

その巳雪さんの大声にあっけにとられた。「満足させてもらってないなんて、そんなことないですッ! 旦那様はわたしに全て

を与えてくださっています」

「み、巳雪さん」

「だからお願いです。そんなこと言わないでください。ふ、服が気に入らないのなら今すぐに捨ててきます。だから、そんなこと、そんなこと言わないでください」

ぼろぼろと泣き出してしまった。

幼い少女みたいに顔をグシャグシャにして泣いている。私は罪悪感でいっぱいになった。なにを言ってもとりつくろうことにならないうことが分かった私は、ぎゅっと、巳雪さんの体を抱きしめた。

「すみません。間違いました」

「旦那様」

「巳雪さんのお金で買ったものなのに……嫉妬してしまっただけです。それで巳雪さん

を傷つけてしまつて……本当にすみません」

ぼろぼろ泣く巳雪さんを見上げる。

力をこめて気持ち传达了。

「わがまま言つて、いいですか？」

「……はい」

「できれば、私の給与の範囲で生活がしたい」

顔が赤くなる。

つまらないプライド。独占欲。巳雪さんを自分だけの女にしたいという気持ちの悪い考え。自分の心境を直視すれば直視するほど恥ずかしくて消えてなくなりたくなる。

（けど、どうしようもない）

私にも男としてのプライドがある。

それだけは消すことができない。

「巳雪さんのお金は大事にとっておいてく

ださい」

「旦那様」

「私ももつとがんばりますから……よろしくお願いします」

頭を下げる。

泣いていた巳雪さんが私の体をぎゅっと抱きしめてくれる。私も負けじと巳雪さんの体を抱く。二人で抱きしめあっていると、まるで一つになったみたいに感じられた。すべて分かりあえているといふ充足感で、3人の元夫のことも気にならなくなる。

「愛しています、旦那様」

うっとりとした瞳で巳雪さんが私を見下ろす。

「もうぜったい……離れたくない」

「私も巳雪さんのこと愛しています」

「幸せです。すごく幸せ」

ぎゅううつと抱きしめあう。

私と巳雪さんが一つになる。

「好きです……旦那様、好き」

「み、巳雪さん」

「好き……んむうッ」

巳雪さんの愛が止まらない。

彼女の唇が控え目に私の唇に触れる。何
度も何度も。彼女のぷっくらとした唇の感
触だけで頭がぼおっとしてしまう。ついに
まれるようなキスを拒否しないでいると、
巳雪さんのキスが次第に過激になっていく。
そしてついに力強く口を吸われ、長い舌が
口の中に侵入してきた。
「じゅばああ……じゅるるううッ！」

激しい。

唾液音がずっと鳴って、目がちかちかす
る。アヒアヒと悶えれば悶えるだけですま
す巳雪さんの舌使いが強くなる。愛情たっ
ぷりのねちっこいペロチュー。熱心に、執
拗に、唇を奪われる。

「旦那様、布団にいきましよう」

久しぶりに唇を解放してくれた巳雪さん

が至近距離から言った。

「いきましよう。ね、いいでしょ？」

「ひいひい……ひいひい……」

「布団で……したいです」

わがままな巳雪さんが魅力的すぎる。

こんな自分のことを求めてくれていると
いうことがすさまじい幸せに繋がる。切羽
つまったような表情を浮かべた巳雪さんが、
続いて、

「お願いです。旦那様のこと、かわいがらせてください」

「あ……ひい……」

「旦那様を困らせてしまったお詫びがしたいんです」

「ひい……ひい……」

「ねちっこく快感だけを与え続けます。精液搾りも我慢して旦那様にずっとずっと気持ちよくなってもらいます。旦那様の肉棒がふやけてしまうまで、この舌で舐めさせてください」

くぱあっと大きな口があいて長い舌が飛び出してくる。

うねうねと蠢いている妖艶なベロ。それを見せつけられて我慢なんてできなかった。「はひいひいッ！ 布団いきますううう」

ッ！

絶叫する。

巳雪さんが笑った。

「たっぷりご奉仕させていただきます」

辛抱たまらんと言わんばかりに巳雪さんが私の体をお姫様抱っこしてしまふ。ふわっという浮遊感と共に私の体が浮かび、そのまま運ばれていく。

「ごめんなさい。でも、このほうがはやいので」

「あひんッ！」

「ふふっ、一刻もはやく旦那様のことメチャクチャにしてあげますからね」

運ばれる。

布団に引きずりこまれて、そのまま言葉どおりにされた。

夜通し永遠とかわいがられる。ひたすらに快感を送り込まれて頭がバカになる。巴雪さんの嬉しそうな笑顔だけが記憶に残った。その笑顔はとても魅力的だった。



次の日の夜。

巴雪さんと本格的に話し合いをした。

これからの夫婦生活について。

お金の使い方とか、そういった現実の話、遅くなってしまったけれどきちんとしたのだ。基本的に巴雪さんは私のわがままを聞いてくれた。自分のお金を自分のために使うなんて当たり前のことなのに、衣服については私が稼いだお金で購入すること

を承諾してくれた。けれど、巴雪さんがどうしても納得してくれないことが一つだけあった。

「旦那様のお食事は、わたしのお金から出します」

この一点について巴雪さんは絶対に折れなくてしななかった。

私の食費なんだから、私が出してあたり前だ。それなのに巴雪さんは断固として首を縦にふってくれなかった。

「旦那様には毎日、栄養バランスのとれた最高級の食材を食べてもらいたいんです」「だ、だけど、身分相応なものっていうか、自分たちの収入にあった食事で十分じゃないですか」

「ダメです。旦那様にはずっと健康でいて

もらいたいんです」

キリっとした顔つきで巳雪さんが続ける。

「これはわたしのわがままです」

「巳雪さん」

「これはわたしのためでもあるんです。そうですね。旦那様の子種を良質に保つことはわたしのためでもあるんです。ですから、わたしが旦那様の食費をもちます」

それくらいはさせてください。

じっと見つめられての言葉。わがままを言っているのは私のほうだったので、それ以上なにも言えなかった。

「でも、お金は大丈夫なんですか？」

「大丈夫です。投資のほうでもきちんと成果は出ていますし」

「と、投資ですか？」

「はい。そうです」

どうやら巳雪さんは家事の合間にデイトレーダーとして活動しているらしい。よく分からなかったが、きちんと利益も出していて、巳雪さんの蓄えのほとんどは、元夫たちの遺産よりも、それを運用して得たお金のほうが大きいらしかった。けっきょく押し切られる形で、私の食費は巳雪さんが負担することになった。

「これからは、なんでも相談しましょうね」
にっこりと笑って巳雪さんが言った。

私も「はい」と素直に応じる。すぐに巳雪さんの瞳がきらりと輝いた。

「それで、さっそく相談なのですが」

巳雪さんが笑って、

「旦那様の子種、限界まで搾り取っていい

ですか？」

「え？」

「これまでみたいに旦那様の体調を考えて手加減するのを止めてみても、よろしいでしょうか」

ドクンと心臓が鳴る。

手加減をしていた？ これまでのあの極上の性技が手加減されたものだと言うのか。それが信じられなくて、あわあわと口をパクつかせるだけになってしまった。

「ダメですか？」

「あひい」

「どうなんです？」

さわさわっ！

彼女の手が私の背中に伸びる。ねっとりとした手つき。それで撫でられ、性感帯を

刺激されて、されるがままになってしまおう。

「手加減抜きで、旦那様のこと責めてみたいです」

「ひいひい」

「旦那様の精子、空っぽになるまでブっこ抜いてさしあげたい」

白雪さんのおっぱいが体にあたる。爆乳がぐんにやりと潰れてそれだけでダメになる。こんなスタイル抜群の女性に誘惑されて、墜ちない雄なんているわけがなかった。

「はひいひいッ！ 本気で犯してくださいいいッ！」

絶叫する。

こんなの相談の形をとった命令だ。選択の余地なんてどこにもない。白雪さんが「くすり」と笑って、私の肉棒を握りしめた。

「嬉しい」

「あ、あ、あ、あ、あ」

「今日も旦那様のこと骨抜きにしてさしあげます」

「ひいいッ！ あひいいッ！」

「極上の性体験をお約束します。豚のような悲鳴を搾り出してあげますね？」

さわさわと愛撫が強くなる。

もう逃げられない。心の底からそう感じた。

「それでは始めましょう」

脳髓を溶かしてしまうような甘い声色が響く。

相談の結果行われるえげつない性行為。手始めに唇が奪われた。

「ぶっちゅうううううッ！」

下品な音が脳みその中で鳴った。

巳雪さんがリップ音を響かせながら私の唇を喰らっていく。下顎から鼻にかけて巳雪さんの長い舌が躍動する。かと思うと彼女のぷっくらとした唇が私の唇に押しつけられ、長い舌が口内で暴れまわっていく。

「アヒインッ！ ひいいッ！」

喘ぐ。

けれど本気になった巳雪さんのディーブキスは私の喘ぎ声ごと丸飲みにしてしまうのだった。過激なリップ音。唾液を啜る音。女性の発情した「んんっ」という甘い声。それだけで私の無様な喘ぎ声は上書きされ、巳雪さんの貪欲な舌と口に食べられていった。

（無理……こんなの無理……）

私の体が命の危険を感じている。

巳雪さんの本気のキスは人類には早すぎるのだ。絶頂死という単語が脳裏に浮かぶ。絶頂して、あまりの快感で脳味噌が焼けきれ、焦げ臭い匂いを周囲に放ちながら息の根を止められてしまう自分が鮮明に想像できてしまった。

(逃げないと……殺されちゃう……)

私のふるふるした両手で巳雪さんの肩あたりをつかむ。

なんとか彼女と距離を置こうと体をよじらせようとした瞬間だった。

「ジュッパアアアッ!　じゅっるっじゅるうッ!」

「あひひいいいんんッ!」
さらに激しくなる舌使い。

それだけで私の両腕がダランと脱力して垂れ下がってしまった。まだまだ本気ではないのだ。それが信じられなくて、私は唇を奪われたままビクンビクンと跳ねて悶えていくしかない。

「んふっ」

嬉しそうに笑ったサキュバスが次の性技に移る。

私という獲物の抵抗がなくなったのをいいことに、彼女の両腕が私の背中から離れた。解放されると思ったのも束の間、魔性の指使いが乳首を蹂躪した。

「んむううううううッ!」

ディープキスされながらの乳首責め。

さらに激しさを増した舌使いが「抵抗するな」と命令してくる。獲物である私はや

はり脱力してビクンビクンと跳ねるだけの
オブジェと化す。そんな過激なベロチュ
をされながらの乳首責め。彼女の長い指が
カリカリと突起をひっかき、そのリズムに
あわせて私の体が痙攣していく。

(し、死ぬ……死んで……)

白目をむく。

ガクガクと痙攣する。絶頂死。このまま
ベロチュと乳首責めだけで殺されてしま
う。本気になった巳雪さんの責めに耐える
ことなんてできない。激し過ぎるディー
プキスで息すらできず、酸欠で頭が麻痺して
いく。キスで窒息死する。冗談ではなく本
当に死ぬ。びくびくと痙攣していく。限界
に近い。このまま愛しい妻にキスだけで殺
され、

「いただきますね？」

がっばおおんんッ！

限界ギリギリで巳雪さんが私の唇を解放
した。

けれどそれで終わりではなかった。彼女
は間髪入れず私の下半身に顔を埋もれさせ
て、バギバギに勃起した肉棒を頬張ってし
まった。根本まで深く、一瞬で丸飲みされ
てしまう。

「ぶひひひひひひひひひッ！」

豚のような悲鳴が自分の口から漏れる。

あまりにも快感がひどすぎて人間の悲鳴
ではダメなのだ。快感を逃がすために豚の
悲鳴をあげて体を痙攣させる。巳雪さんは
宣言どおり、私の口から豚のような悲鳴を
あげさせてしまった。私の肉棒を頬張った

まま、彼女がうっとりとした瞳でそれを聞いていく。

「んふっ」

深く丸飲みしたまま彼女の長い舌だけで肉棒を這っていく。

ピストンは始まっていない。だからこれは生殺しだ。彼女の本気のフェラチオを想像しただけで脳味噌がイク。快樂地獄に落とされて、生殺しにさせられる。喉奥まで深く私の肉棒を頬張った女性が、ジュルジュルと舌だけを動かしていった。

「み、白雪ちゃん」

「んふっ?」

「ひゃ、ひゃめでええッ! 食べちゃダメえええッ!」

「んフッ」

「あ、あ、あ、舌ああああッ! 舌そんなふうに動かさないでえええッ!」

生殺し状態で舐められる。

私が制止すればするほどその舌使いは過激になった。こちらを上目遣いで見上げてくる白雪さんの瞳が妖艶に光っている。彼女も楽しんでいるのだ。獲物が悶えているのを見て興奮している。それが分かった。

「ガッポオッ! ジュブウウッ!」

そして唐突にピストンが始まってしまった。

目の前の美しい女性が両頬をすばませながら、頬肉と頬肉で肉棒をレイプしていく。その間も舌が這いまわって快感のポイントを絨毯爆撃していた。耐えられるわけがない。

「ぶひいひいひいひいひいッ！」

豚の悲鳴をあげる。

自分の口がパクパクと動いているのが分かる。快感が強すぎて何がなんだか分からない。豚の悲鳴をあげている時だけ意識を保っていることができる。巳雪さんが飽きることなくピストンを繰り返して、極上のフェラチオを繰り返していく。我慢なんてできるはずがなく、私は射精して、「ダメです」

ぎゅうううううううッ！

私が射精する瞬間に巳雪さんが片手で私の肉棒の根本を握った。

今まさに射精した精液の爆発がそれでき止められてしまう。精巢から発射した白い液体が巳雪さんの美しい手によって通せ

んぼされて射精もできないのだ。そんな状態で巳雪さんがまたしても肉棒を丸飲みし、射精を封じたまま男殺しのフェラチオを始めてしまった。

「びっぎいひいひいひいッ！」

豚の悲鳴が自分の口から出てくる。

頭がおかしくなる。快感とは地獄だ。巳雪さんが両頬をすぼませて、グジュウッ！ ジュポオッ！ と盛大な音をたてながらピストンを続けてくる。彼女の唇の感触も舌の感触も恐ろしい快感を伝えてきた。

「み、巳雪しゃあんんッ！ ひゃめでええええッ！」

必死に懇願する。

しかし返ってきたのは、
「ジュポオオッ！ ガポオオッ！」

強烈なピストンだけだった。

まるで「まだ人間の言葉を喋れたのか」と叱責するようなフェラチオ。巳雪さんが私の太ももを抑えつけ、美しい顔を私の股間に埋めながら、激しいフェラチオを続けていく。

「ぶ、ぶっひいひいッ!」

私にできることは豚の悲鳴をあげることだけだった。

男殺しのフェラチオで人間としての自分が殺されていくのが分かる。体を痙攣させて豚の悲鳴をあげ続ける。射精を封じられながら徹底的に食べられていった。

「ふふっ」

巳雪さんが笑った。

豚の悲鳴を堪能して満足したのだ。彼女

が握っていた肉棒から手を放す。そしてトドメと言わんばかりの勢いで肉棒を貪り喰らってきた。

「びっぎいいいいいいいいいいッ!」

どっびゅうううううううッ!

びゅっびゅううううううッ!

射精した。

巳雪さんの口の中で精液が爆発していく。彼女の喉奥に白い液体が打ちつけられる音が聞こえてくる。常人なら咳き込むのが普通なのに巳雪さんはニッコリと笑顔のままだった。それどころか、射精中の肉棒に追いつき打ちをかけてくる。

「じゅぽおッ……じゅるるうッ」

ゆっくりと再開されるピストン。

射精の脈動にあわせて彼女の顔が上下に

動く。快感が強すぎて自分の体が暴れる。そんな私の体を抑えつけて完全にコントロールしながら、巳雪さんがフェラチオを続けていく。どうあがいても逃げられないと悟った私はますます射精し、されるがままになった。

「んふっ」

じゅるるるるるッ！

「ひひひひひひひひッ！」

獲物が逃げなくなったことをいいことに巳雪さんが私の亀頭だけを狙いうちにしてしまった。

亀頭だけを唇で覆うようにして頬張り、ぐりぐりと回転が加えられる。舌が鈴口を突っついてそこから溢れる精液をさらにせっついていく。もっと射精しろ。もっと精液を

寄越せ。そんなふうに思っていることが分かる苛烈さで巳雪さんの亀頭殺しが続いていく。

「ゆるじで……ゆるじで……」

涙がぼろぼろこぼれていく。

それでも巳雪さんがフェラチオを止めることはない。それどころか「まだ人間の言葉喋ってる」と呆れたように笑って、苛烈なフェラチオが再開する。もうとつくにすべて奪われ、精液がでなくなった肉棒が、それでもヒクヒクしながら空打ち射精を繰り返していった。

「ぶひひひひひッ！　ぶひひひひひッ！」

そうなったら私は豚の悲鳴をあげるしかない。

私は人間を辞める。「ぶひぶひ」と喘ぎな

がら精液の出ない射精を強制されていく。ずつとずつと、それが続いた。

「ふふっ」

どれくらい時間が経ったのだろう。

気がつくと巳雪さんの顔が間近に迫っていた。

肉棒は解放され、すっかり縮んで息絶えている。搾り取られてしまった。そう実感していると目の前の巳雪さんが口を大きくひらいた。

「うっ」

そこに溜まった精液の量に驚く。

こんな射精の量、自分には無理だ。明らかに限界を超えて射精している。目の前の女性にすべて奪われてしまったのだ。それが分かった。

「んふっ」

ゴクンッ！

巳雪さんが一飲みする。

彼女の喉が脈動するのを目の前で見せつけられる。再び彼女が口をひらくとあれだけ溜まっていた精液が一滴たりとも残っていなかった。すべてを巳雪さんが捕食してしまったのだ。

「ふふっ、ごちそうさまでした。旦那様」

「ぶひい……ぶひいい……」

「今日もとってもおいしかったです」

「ぶひい……ひいひい……」

「ふふっ、もう豚の真似しなくていいですよ」

優しく頭を撫でられる。

しかし私の口から出るのは、

「……ぶひいい」

豚の鳴き声だけだった。

目の前の妻が優しく笑う。

「ごめんなさい。少しやりすぎてしまいましたね」

優しく頭を撫でられながら巳雪さんの声を聞く。

「これからは、なんでも相談しましょうね」
「ぶひいい」

「今日はこのままお眠りください。大丈夫。怖いものなんて何もありません。旦那様のごことはわたしが必ず守りますので」

母胎にいるような安心感。

巳雪さんの笑顔。私はそのまま意識を手放した。



なんでも相談しましょう。

そう決めてからというものの、巳雪さんからの相談が終わらなかつた。

今日も夜になると彼女の「相談」が始まってしまう。

「旦那様、今日は手でいじめてあげたいです」

自宅のリビング。

そこで私は背後から巳雪さんに抱きしめられている。

背中には大きなおっぱいの感触。身長差があるので彼女は少しかがみながら立っていた。私の小さな体を後ろから抱きしめて、その美しい両手を私に見せつけてくる。

「ほら、この手です。見えますか？」

彼女の両手がひらく。

大きな手。陶器のような肌と長い指。それが目の前に広がり、私の口から「はあはあ」と荒い息が漏れる。

「この手で、旦那様をかわいがってあげたい」

「ひいひい……ひいひい……」

「わたしの本気の手コキ、すごいんですよ？」

はまってしまった殿方は、その後、手コキばかり希望してしまうんです。自分でオナニーしても射精できなくなるみたいで、わたしがシコシコしなければ一生射精できなくなってしまうです。それだけ気持ちがいいんでしょうね。どんなに偉そうな殿方でも、すぐにアヒアヒ言いながら射精して

しまいますから」

ねっとりとした声が背後から聞こえてくる。

分かりやすく誘惑されているのだ。

「ほら、こうやって動かすんですよ」

予行練習が始まる。

彼女の右手が肉棒を握る形となって、シコシコと上下運動を始めてしまった。その指の形が変幻自在に変わっていく。今は龜頭をいじめているのだろう。彼女の親指がグリグリと架空の肉棒の上部を虐めていた。「ああああッ」

それを見ただけで射精しそうになる。

この手コキをされたらどうなってしまうのだろう。あまりの快感で今度こそ発狂してしまうかも。その恐怖と期待で体が痙攣

してしまった。

「これは「相談」ですよ、旦那様」

「あひい」

「わたしの手コキで、旦那様のことかわいがらせてください」

「ひいい」

「わたしのわがまま、聞いてください」

「ひゃあ」

「ね、いいでしょ旦那様。お願いです。相談に応じてください」

耳元で囁かれる。

男が我慢できるはずがない。

「してえええええッ！ してくださいいいッ！」

私は叫んでいた。

「巴雪さんの手コキでめちゃくちゃにしてえ

ええッ！ 射精させてくださいいいいいッ！」

恥も外聞もなく絶叫する。

後ろの巴雪さんが「んふっ」と笑った。

「ありがとうございます旦那様」

「あひいいいッ」

「相談の結果、今日も旦那様のことをかわいがってあげられます」

「み、巴雪ちゃん」

「いきますね？」
がしっど。

力強く巴雪さんの右手が私の肉棒を握る。

まるで私が心変わりをしないうちに始めてしまおうという拙速さで、彼女がいきなりシコシコを始めてしまった。

「ひっぎいいいいッ！」

最初から巴雪さんの手コキは苛烈だった。

彼女の美しい手が私の醜い肉棒を握り、シコシコを繰り返していく。指の形が次から次へと変わる。適当な動きではない。私が一番感じる部分を的確に刺激できるように指の形を変えながら、最適な力加減でもってシコられる。こ、腰が、ガクガク痙攣して、た、立っていられない。

「ちゃんと立ってください」

「あひひひひひひッ！」

「きちんと立ってないと、お仕置きですよ？」
背後からの妖艶な囁き声。

それに叱られて足腰に力を込める。けれどダメだ。私の努力なんて根こそぎ蹂躪してしまえる巴雪さんの手コキによって、私の膝がガクンと崩れてしまった。

「あゝあ、お仕置き決定ですね」

背後からの言葉。

彼女の左腕が私の胴体を抱きしめ強引に立たされる。ガクガクと足腰がふるえているのに羽交い絞めにされて倒れることもできない。彼女の大きな体に埋もれるみたいに抱きしめられ、そして本気の手コキが始まってしまった。

「ぎゃあああああッ！」

手コキをされているのに断末魔の悲鳴があがる。

明らかに手加減がなくなってしまった。力強く握られた肉棒が視認できないほどの速さでシコシコされていく。そんなに乱暴にされたら普通は痛みしか感じない。男の急所は敏感なんだ。それなのに巴雪さんが力強く手コキをすると、それは快感100%

の地獄にしかならなかった。

「ひゃめでえええええええッ！」

シコシコッ！

ジュブウッ！　ぐじゃあっ！

「ゆるじでえええッ！　これムリですうううッ！」

しこしこッ！

グジュウッ！　ジュバアッ！

「たじゆげでえええええええッ！」

悲鳴をあげながら逃げようとする。

それを左腕一本だけで羽交い絞めにされて拘束される。逃げられないことを分からされてシコシコされる。巳雪さんの右手が力強く私の肉棒を虐殺していった。

「これはお仕置きですよ、旦那様」

「ひぎいいいいッ！」

「きちんと立てなかった旦那様が悪いです」

「た、たじゆげでええええええッ！」

「んふっ、続けますね？」

地獄が続く。

もうどうしようもない。

私は背後から大きな女性に抱きしめられ、おっぱいに生き埋めにされながら、ずっと手コキで悶絶させられる。白目をむいて悲鳴だけが漏れていく。もうダメ。死ぬ。頸動脈を掻き切られた時にあがる血しぶきみたいな射精が、私の肉棒から噴き出した。

「ひいいいいいいいいッ！」

どっびゅうううううッ！

びゅっびゅっどびゅうッ！

それを巳雪さんは左手で受けていった。彼女の大きな手のひらに白い液体が溜まっ

ていく。彼女の左手が精液でいっぱいになる。地面に垂れてしまう。その瞬間、

「はい、ストップ」

ぎゅううううううッ！

「あっぎいいいいッ！」

巴雪さんの右手が私の肉棒の根本を握りしめた。

それだけで射精中の精液がせき止められて射精がぴたっと止まってしまった。強制的に射精を奪われたのだ。それが分かった。

「射精途中で止められると、辛いですよね？」

「っ、つらいいいいいいッ！」

「死にそうですか？」

「し、死んじゃううううッ！」

「んふっ、かわいい。でも旦那様の精液は無駄にしたくないんです。ですから食事が

終わるまで我慢してくださいね」

悪魔のような笑顔を浮かべているのだろう。

背後でその顔が見えなくてもそれが分かった。彼女が左手を私の顔の前に持ってくる。そして、くばあっと手の平をひらいた。大量の精液がこべりついた左手が見えてくる。

「いじめちゃいますね？」

ぐじゃああッ！

ひらかれていた手の平がとじられる。拳骨をつくるように力強く握りしめられる。ぐじゃぐじゃと彼女の手のひらで私の遺伝子情報が殺されていくのが分かる。それを見せつけられただけで興奮してしまった。

「んふっ」

私を発情させることにまんまと成功した
巳雪さんが笑う。

そのまま彼女が左手を自分の口元へと近づけていく。一瞬だった。あまりにも簡単に食事が終わる。背後で、ゴクンと喉が鳴る音が、すごく大きく聞こえた。

「はい、食事が終わりました」

再び左手が私の眼前に近づけられる。

とじられていた手のひらがひらかれる。そこには一滴の精子も残されていなかった。

「おいしかったです」

「あひい……ひいい……」

「旦那様の子種は本当に上質ですね」

「み、巳雪ちゃん」

「ふふっ、それじゃあまた相談しますね」

彼女が私の耳元で、

「旦那様、精液搾りを続けさせてください」

「あひんッ！」

「さきほどみたいに、わたしのえげつない手コキで射精してもらいたいです」

「あひいッ！ ひいいッ！」

「これは相談です。旦那様が応じてくれないと、これで終わりにしないとイケません」

悪魔だ。

サキュバスが「相談」の形で命令してくる。

「ね、どうですか旦那様。わたしの相談に
応じてください。お願いします」

選択の余地などなかった。

私の口から絶叫がほとばしった。

「してええええッ！ してええええッ！」

「なにをです？」

「手ですうううッ！ 巳雪さんの手ええええッ！」

「わたしの手がどうかしましたか？」

「手コキいいいいッ！ 手コキしてええええッ！ 搾り取ってえええええッ！ いいじわるしないで射精させてくださいいいいいいいッ！」

駄々をこねる子供みたいに懇願する。

すぐに背後のサキュバスが笑った。

「相談、成立ですね」

がしいいいッ！

獰猛な肉食動物みたいに彼女の右手が私の肉棒を握る。それだけで私の全てが握りしめられてしまったと、実感できた。

「今日は空っぽになるまで搾り取りますね」

「あひいいッ！ あひんッ！」

「ちゃんと相談したんですから、いいんですよね？」

「ひいいッ！ ひいんッ！」

「旦那様の精液、ブっこ抜いてさしあげます」

そして始まる。

彼女のわがまま手コキが永遠と続く。射精して左手いっぱいに溜まると食事が始まり、そしてまた相談が始まるのだ。それが繰り返される。精液が出なくなっても終わらない。夜通し、巳雪さんから「相談」され、そして射精を繰り返していった。



会社の中。

自分のデスクで経理の仕事に集中しようとする。

しかし、どんなに努力しても、仕事にかかわらず「夜」のことを思い出してしまい、頬がゆるんでしまうのを我慢できなかった。

（わがままな巳雪さんっていうのも魅力的だな）

嗜虐的な笑顔はとても魅力的だった。

「相談」と称した強制射精も病みつきになりそうで怖くなる。

けれど、ちゃんと相談するとやはり心が通じ合っていくことが分かった。なんというか、きちんと話し合いをすることで、さらに夫婦としての絆が強まった気がする。こう感じているのが自分だけでなければい

いんだけれど……そんなことを思った。

「あいかわらず、尻に敷かれてるって感じだな」

昼休み。

ラウンジで愛妻弁当を食べながら巳雪さんのことを考えていると、郷田が軽口を言ってきた。

「別に尻に敷かれてなんていない」

「そうか？ 最近のおまえ、心ここにあらざって感じだぞ」

むしゃむしゃと菓子パンを頬張りながら郷田が言う。

「おまえも男なんだ。もっと男らしく嫁さんにはびしっと言ってやらなきやダメだぞ」

独身男がなんか言っている。

無視すればいいのだろうが、どうにも郷

田の言葉が頭にひっかかって仕方ない。

「男らしく、か」

男らしく。

たとえばセックスで巳雪さんのことを満足させられたらどんなにいいか……と考えたところで唐突にきづく。これまでの夜の生活は単純に私が搾り取られるだけで終わっている。よく考えてみれば、私は一度も巳雪さんに挿入したことすらなかった。

(考えてみれば、変だよな)

口か手で搾り取られるだけ。

その一つ一つがすさまじい技巧であることに違いはないが、セックスが一度もないというのはおかしい気がした。あれだけ積極的に私のことを犯してくる巳雪さんが、セックスだけはしてこないことに、何か理

由があるような気がしてくる。

「郷田」

「なんだよ」

「ありがとな」

「は？」

訳が分からなそうにしている友人を無視して、私は決意していた。相談すればいいのだ。夫婦のことはなんだって相談して解決すればいいのだった。私はさっそく、帰宅した後、巳雪さんに話しをすることにした。



自宅で食事を終える。

食卓に二人で座って、テレビを見たり、今

日あった出来事について雑談をしていく。ほがらかに笑ってくれる巳雪さんがとにかく美しかった。

(そろそろ、相談してみようか)

昼間の疑問点。

私は緊張しながら言った。

「あの、巳雪さん」

「どうしましたか、旦那様？」

「ええとですね」

「はい」

「セックスしませんか？」

「え？」

「セックス、したいです」

シーンと静まりかえる。

巳雪さんの呆然とした表情が私に突き刺さってくる。ゴクンと誰かが唾を飲み込ん

だ。

「あの、旦那様」

不安そうに。

瞳をうるうるさせて巳雪さんが言う。

「ひょっとして、ご満足いただけいてませんでしたか？」

「え？」

「これまでのわたしじゃ、満足してもらえてなかったんでしょうか」

これまで。

フェラや手で搾り取られてきた毎日のことが思いだされる。満足なんてするにきまっていた。けれどそれとこれとは話しが別だった。

(男をみせない)

私は言った。

「一つになりたいんです」

「え？」

「巳雪さんと、一つになりたい」

かああっと、巳雪さんの頬が赤くなる。

それ以上に私の顔も真っ赤になっている

はずだ。目の前の巳雪さんが、ぼろぼろと

泣き出した。

「……嬉しい」

泣いて手で涙をぬぐいながら、巳雪さん

が、

「でも、怖いです」

「怖い？」

「はい。すごく……怖い」

どうということだろう？

私は巳雪さんが落ち着くのを待った。

「……腹上死なんです」

「え？」

「これまでの旦那様の死因は、全員、腹上

死なんです。わたしとのセックスの最中に、

みなさん死んでしまいました」

ドクン、と。

私の心臓が大きく鳴った。

「わたしの性器は、男性の精を搾り取るた

めに進化しているんです。挿入すると普通

では考えられない快感が生まれ、殿方に過

剰な負担がかかってしまうようなんです。

ずっとずっと、射精しっぱなしですから」

彼女の下半身に視線が吸い込まれる。

その場所。

そこで何人もの男たちが精を搾り取られ、

命まで搾り取られてしまったのだ。男の生

命を吸収してしまう特別な場所。私はゴク

りと唾を飲み込んだ。

「わたしが腰を振ると旦那様たちはすぐに射精します。その快感は拷問を受けたみたいにひどいものらしくて、旦那様たちは泣き叫びながら果てていきました。わたしも自分をおさえられなくて、泣き叫んで命乞いをする旦那様に容赦なく腰をふるってしまっ、それで搾り殺してしまうんです。ダメだと分かっているけど何度も腰を振ってしまっ、きづいた時には旦那様は死んでいます。まるで干物みたいに体の精気をぜんぶ搾り取ってしまっ……殺してしまうんです」

泣く。

うるうるすると瞳にたまった涙がこぼれていく。

「き、嫌いになりましたか？」

不安そうに巴雪さんが言う。

「こんな怖い女、旦那様も嫌ですよね」

「み、巴雪さん」

「旦那様のことを搾り殺してしまうかもしれないんですもの」

「……………」

「私のような化け物、やっぱり旦那様にはふさわしくない」

さらに泣き続ける。

けれど分かったことがあった。

巴雪さんの自信のなさや、卑屈な態度がこれが原因だったのだ。最愛の人を搾り殺してしまったことに対する罪悪感。これがあるから、巴雪さんはいつも、どこか自信がなさそうに卑屈な態度になっていたのだ

ろう。

(優しい人だ)

私はそう思った。

だから、

「大丈夫です」

なんの根拠もなく、

笑顔で言った。

「絶対に死にませんから」

「旦那様」

「だからセックスしましょう」

驚いたように巳雪さんの瞳が見ひらかれる。

そして、トロンとした瞳で嬉しそうに、

コクンと頷いてくれた。

*

布団が敷かれる。

私も巳雪さんも生まれたままの姿になって、体を重ねた。彼女のむきだしのおっぱいによって私の胴体がぐんにやりと潰され、それだけで頭がおかしくなりそう。

「んむう……じゅるう……ジュパアッ！」

優しく、丁寧な、それでいて執拗に巳雪さんが私の唇を奪っていく。

彼女の長い舌が私の口内で暴れている。その快感に耐えられなくて、私は目をぎゅっとつむって、されるがままになってしまった。

「乳首もしますね」

彼女が私の乳首を舐め始める。

もう片方の乳首を人差し指でカリカリし

ながら、じゆるじゆるっと唾液音をたてながらひたすらに乳首だけを刺激していく。私の口から漏れる喘ぎ声が高くなる。生娘みたいな甲高い声をあげて鳴く私のことを見つめながら、献身的な巳雪さんの責めは終わってくれない。

(愛撫されてる……性感を高められていく)
これ以上興奮できないほど執拗に、巳雪さんが私の体を責めてくる。

ハートマークで一杯になった瞳を浮かべ、目の前の獲物に快感という名の毒を送り込むことに集中してしまっている。

(期待しているんだ、巳雪さんも)
それが分かる。

彼女もまた、この後のセックスに期待して、発情して、我を忘れてる。だからこ

そ、獲物が逃げないようにねちっこく前座を繰り返す。快感で何も考えられないようになるまで獲物を追い込むのだ。

「旦那様、本当にいいんですか？」

馬乗りになった巳雪さんが言う。

発情しきった瞳に若干の心配の感情が浮かんでいる。それでも期待していることは明らかだった。はやく目の前の肉棒を丸飲みしたいと、彼女の全身が訴えかけてきている。

「も、もちろんです」

「でも……」

「巳雪さん、私は絶対に死にません。だから安心してください」

自信をもって言い切る。

巳雪さんが顔を真っ赤にして完全に発情

モードに入る。彼女の秘部が私の肉棒の先端にあてがわれた。仰向けに倒れた私の下半身にまたがって、「ふうふう」と息を荒くして興奮している捕食者。そんな彼女がなけなしの理性でもって言った。

「限界だったら、すぐに言ってくださいね」

「は、はい」

「絶対ですよ？ 無理はしないでください」
発情しっぱなしの瞳をウルウル潤ませながら言う。

そんなふうに関心することを心配してくれる女性が、今では全裸でがに股をひらきながら私の龟头をくわえこもうとしているのだ。そのギャップに、私はゴクリと唾を飲み込んだ。

「いきます」

ゆっくりと。

巳雪さんが腰をおろしていく。

最初に龟头が飲み込まれた。

それだけで「あ、絞られる」という感想が脳裏に走る。

(巳雪さんの……性器……)

目の前。

そこには使い込まれていながらも、初々しくもみずみずしい密壺があった。控えめな茂みの中に鎮座しているその場所は、うねうねと蠢きながら獲物を引きずこもうと虎視眈々狙っているように見えた。そんな場所に、私の肉棒が丸飲みされていく。

「ンンッ」

ゆっくりと巳雪さんが腰を落としていく。

いきなり腰を深くおとしたりしない。

おそらく手加減をしてくれているのだろう。少しづつ丸飲みすることで、快感に慣れさせようとしているのだ。じっくり、じつとりと、目の前で私の肉棒が丸飲みされていく。

（食べられていく……私の肉棒が巳雪さんに食べられて……）

目の前の光景から目がはなせない。

巳雪さんの秘所がゆっくりと肉棒を丸飲みしていく。蛇が獲物を生きたまま捕食して、獲物の体全体を吸収してしまうような光景に目がくぎづけになる。亀頭が完全に食べられる。竿の中央付近までじつくりと食べられ、それでも丸飲みは終わらない。ハアハアと興奮した荒い声が漏れる。興奮のドーパミンが砕け散った後、肉棒の異変

に初めて気づいた。

（な、なにこれええええッ！）

私の肉棒に伝わってくる感触。

巳雪さんの体内。

そこは信じられないほど熱く、そしてぐねぐねと蠢いていた。ゆっくりと腰をおとされていくだけなのに、密壺の中ではイソギンチャクみたいな軟体生物が縦横無尽に私の肉棒をレイプしていくのが分かる。それは明らかに男の精液を搾り取るためだけに進化した場所だった。

「ひいひいひいッ！」

声が漏れてしまう。

体がガクガクとふるえる。

布団のシーツをがっちりとかんて、なんとか快感を逃そうとする。しかしこの快

感をどこかに逃がすなんて不可能だった。私にはやくも後悔し始めた。

(こんなの耐えられるわけない)

男なら誰だって無理だ。

我慢するとかしないと、そういうレベルの話ではない。彼女の密壺の中に挿入されてしまえば、男はただただ巳雪さんに精液を提供するだけのエサに変えられてしまう。そこに意志の強さなんてまるつきし関係なかった。強制的に精液を搾り取られてしまう。そんな格上の存在。私は自分の浅はかさに後悔していた。その後悔は、巳雪さんの今の状態を見てさらに高まった。

「ふう——フウウッ——」

私の体の上で一匹の獣が興奮した声をあげている。

巳雪さんが理性をなくした様子で悶えていた。体をプルプルふるわせながら、恍惚とした表情を浮かべているのだ。その表情を見ただけでどんな男でも発情してしまうような妖艶な雰囲気。巳雪さんが私の肉棒をくわえこみながら、「アアッ」と甘い声をあげている。

「ひさしぶりの、殿方の……んんッ！」

悶えながら巳雪さんが肉棒を丸飲みしていく。

ぐねぐねという密壺の蠢きは、信じられないことに奥に引きずりこまれば引きずりこまれるだけ強さを増していった。もう元に戻れない。そんなことを思いながら、情けないことに限界を思い知る。

「旦那様、すごいです。すごくたくましい」

「あひい……ひいひいッ！ 中動かさないでええッ！」

「旦那様の全部が……んんッ……全部がほしいです。いいですよね、旦那様？」
待って。

その制止の言葉は次の瞬間、彼女の桃尻が私の下腹部に勢いよく打ちつけられたことによって砕け散った。

ばあんっ！

「ひいひいひいッ！」

どっびゅううううううッ！

びゅっびゅうううううッ！

情緒もひったくれもなかった。

彼女の腰が完全に落とされ、体重をかけて私の体に馬乗りになった瞬間、私の肉棒がたまらず射精した。彼女の体内に強烈な

射精を放ち、それがずっと続く。射精と同時に彼女の体内がさらに蠢く。私から一滴も残さず精液を搾り取ろうとしている。獲物がどうなるうが関係ない。巳雪さんの密壺が蠢き、私から精液を奪っていく。

「巳雪しゃああんんんッ！」

叫び、暴れる。

強烈すぎる射精体験で頭が完全に壊されていくのが分かる。

命の危険を感じてなんとか逃げようと私の体がジタバタと暴れようと、

パンッ！ パアンッ！ パンッ！

「あっひいひいひいッ！」

そんな私の抵抗を粉々にするために、巳雪さんが腰を振り始めた。

そこに優しさやいたわりといったものは

どこにもなかった。ただ暴力的に、彼女の巨尻が私の玉袋ごと押し潰し、肉棒をレイプしていく。

「イってうるうッ！ 射精してるからああああッ！ 腰振りやめてえええッ！」

泣き叫ぶ。

それでも巳雪さんはやめてくれない。過激で暴力的な腰振りが続く。

「ふふっ」

笑いながらの腰振りセックス。

その顔には明らかな愉悦が浮かんでいた。優しそうな笑顔はどこにもなかった。ニンマリとした笑顔はどこからどう見てもサディストのソレだ。

「旦那様、もつとください」

熱に浮かされた声で巳雪さんが言う。

いや、本当にこの女性は巳雪さんなのか？ 同じ顔をした別人に思えてならなかった。理性の下に眠っていた恐ろしい本能に彼女が支配されているように見える。それほどまでに巳雪さんは豹変していた。

「もつとです。もつと」

パンッ！ パアンッ！ パンッ！

「もつと……もつと……」

パンッ！ グッジョンッ！ パッチュ

ウウッ！

「もつとよこせ」

パンパンパンッ！ パアアンッ！ グッ

ジョンッ！

乱暴な口調になった巳雪さんの瞳が怪しく光る。

明らかに理性がなくなっていた。

残っているのは彼女の本能だけだ。

その瞳が悦びに支配されていく。

腰振りが強くなる。

亀頭ギリギリまで持ち上げられた巳雪さんの腰が、次の瞬間には私の玉袋ごと肉棒を押し潰す。こんなにも勢いよく腰を振ったら肉棒が抜けてしまうのが普通だろうが、巳雪さんの技量の前ではどんなことでも可能だった。亀頭ギリギリまで持ち上げられて、いっきに根本まで丸飲みになされ、巨尻で潰される。まるで彼女の巨尻で餅つきでもされているみたいだ。その大きなお尻は男の小さな体なんて簡単に制圧してしまう。信じられない速度で腰が振るわれ、私の体がべちゃんにされる。床に縫いつけにされたまま、毎秒ごとのピストンで肉棒をレ

イプされていった。

「あっひいいいいいいッ！」

射精が終わらない。

射精途中でも容赦のない腰振りで精液が奪われていく。これは明らかにおかしい。普通だったら空っぽになっていてもおかしくないのに、私の肉棒からは子種が搾り取られ続けていく。

(命が……消えて……)

自分の命を精液に変えられている。

私の大切なものがすべて奪われていく。

私の体にまたがって腰を振っていく女性にぜんぶ奪われていくのだ。中出しをして種付けをしているはずの男が、なすすべもなく搾り殺されようとしていた。

「死んじゅうううッ！ たすけてえええ

ッ！」

「ふふっ……もつと……もつと……」

「だめえええ！ 死んじゃうからあああッ！

もう搾り取らないでえええッ！」

「……………」

「腹上死しちゃうからあああッ！ 腹上死

しちゃうからあああッ！ もうやめて

くださいいいいいッ！」

泣き叫ぶ。

もうやめてほしくて。

殺されたくなくて。

滑稽な命乞いで巳雪さんに懇願する。

「うるさい」

「むぐううッ！」

けれど無駄だった。

本能むきだしになった巳雪さんが私の顔

面に覆いかぶさってくる。彼女の巨大な生

乳が私の顔面を生き埋めにしてしまった。

私の小さな体を押し潰した状態で、巳雪さ

んが腰だけを豪快に動かしていく。

「うふっ、勢いがすごくなった」

「むうううううッ！」

「このまま搾り取る」

パンパンパンッ！

グリッ！ グリグリッ！

腰振りだけでなく、回転まで加わる。

射精の勢いが強くなる。

命が子種に変えられて永遠に搾り取られ

ていく。

（死ぬ……このままじゃ、本当に……）

けれど、どうにもならない。

心のどこかであきらめが生まれる。

自分よりも上位の存在に捕食していただく幸せ。あまりにも快感の激痛がすぎまじくて、この拷問みたいな搾精を正当化したくて、そんな考えが頭を支配していく。白雪さんのような美しい生物に搾り殺される。彼女の養分となって、彼女の一部になる。それはどんなに幸せなことだろう。白雪さんと一つになれるのだ。これ以上の幸せはありえないことが分かる。

(でも、それだと……)

白雪さんが悲しむ。

私のことを搾り殺した後……理性を取り戻した白雪さんがどれほど悲しむか。それが手にとるように分かった。

(ダメだ……それだけは……ダメだ)

約束したんだ。

死なない。絶対に、白雪さんを一人で残したりしない。

(白雪さん)

腰振り続ける白雪さんの背中をぎゅうっと抱きしめる。

なんのためかはわからない。けれど愛情をこめて彼女の背中を抱きしめ、その背中を撫でた。その間もずっと腰振りは続き、私の精液が搾り取られていく。意識がなくなるまで、私はずっと彼女の体を抱きしめ、絶対に死なないとそんな決意だけをもったまま、最後には意識を失った。

*

「……………さま……………」

声が聞こえる。

誰かが私のことを心配している。

必死の問いかけがどこか遠くから聞こえてくる。

「旦那さま……」

意識が戻る。

目の前で巳雪さんが泣いていた。

「旦那様ッ！」

大きな声で完全に覚醒した。

体中の力が抜けていて指一本動かせなかった。視線だけを動かして巳雪さんのポロポロと泣きっぱなしの表情を見上げた。

「ね、大丈夫だったでしょ？」

精一杯の強がり。

笑おうとして、その瞬間、表情を動かすこともできないほど消耗していることに気

づく。

「旦那様……生きて……」

「あたりまでですよ。約束したじゃないですか。巳雪さんを一人で残したりしない。絶対に死なないって」

ぼろぼろと巳雪さんの涙が私の顔に垂れてくる。

罪悪感に染まったその表情。

あやうく搾り殺しそうになってしまった、巳雪さんが自分のことを責めてしまっている。巳雪さんを不安にさせている。そのことがどうしても許せなかった。

「巳雪さん」

今度こそニッコリ笑って、私は精一杯の虚勢をはって言った。

「すごく気持ちよかったです」

「……旦那様」

「またセックスしましようね」

巳雪さんの瞳からうるうるると涙がこぼれる。

それ以上言葉は必要なかった。

謝罪の言葉とか、自分のことを責める言葉とか、そういったものをすべて飲み込んで、巳雪さんがニッコリ笑った。

「はい、旦那様」

抱きついてくる。

私の精液を搾り取って、ますます魅力的に力を増した巳雪さんの体。その極上の女体にぎゅううっと力強く抱きしめられて、優しいキスが唇をついばむ。

「旦那様……私の旦那様……」

「巳雪さん」

「ぜったいに放しませんから。ぜったいに旦那様にふさわしい女になりますから。だから、一生、おそばにいさせてください」
うわごとのように言う。

疲れていたのか、巳雪さんはそのまま眠ってしまった。私も気だるげな雰囲気と全身の倦怠感に包まれたまま、再び意識を手放そうとする。

「愛しています、巳雪さん」

だから、

「幸せになりましたよ」

私もぎゅっと巳雪さんを抱きしめる。

二人で一つになって、私たち夫婦は一緒に眠りへと落ちていった。